

余山貝塚確認調査報告書

昭和63年度

ちょう し よ やま
銚子市余山貝塚確認調査報告書

— 千葉県主要貝塚確認調査報告書第1集 —

昭和63年度

財団法人千葉県文化財センター

序 文

千葉県には、数多くの埋蔵文化財が所在していますが、中でも貝塚は、その質、量において全国的にも秀でており、極めて重要な地域として注目されています。千葉県教育委員会では、昭和55年度から昭和57年度までの3箇年をかけて、国庫補助事業による県内所在貝塚遺跡詳細分布調査を行い、550箇所の貝塚が所在することを確認しております。

本県は、首都東京に隣接しているということなどから、住宅、交通網整備など様々な開発が進行しています。開発の波の中で、どのように文化財の保護を図って行くかが今日の大きな課題ですが、このことは、重要な貝塚にとっても例外ではありません。

このため、前回の分布調査の成果を基に、特に重要性が高くかつ開発等の影響を受ける恐れのあるものについて、貝層の範囲、内容などを把握し、保護、活用を図るための資料を得る目的で、国庫補助を得て5箇年の予定で確認調査を実施することとなりました。

初年度に当たる今年度は、銚子市余山貝塚の調査を行いました。余山貝塚は、明治30年に知られて以来今日まで、多くの考古学研究者により調査され、考古学史上にもしばしば登場する、極めて著名な遺跡ですが、それにもかかわらず、遺跡の範囲や貝層の分布などの基礎的内容については明らかにされていない現状でした。今回の調査では、多量の遺物はもちろんのこと、これまで不明確であった貝層の分布状況及び遺跡の明確な範囲、地形を把握することができました。

このたび、その成果を調査報告書として刊行する運びとなりました。本書が学術資料としてはもとより、文化財の保護、活用のために広く県民の方々に御利用頂けるよう期待しております。

終わりに、調査の実施に際しては文化庁をはじめ、銚子市教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者をはじめとする地元の皆様など多くの方から御協力を頂きました。心から感謝の意を表します。

平成元年 3月31日

千葉県教育庁文化課長
竹 内 一 雄

例 言

1. 本書は、千葉県銚子市余山町353-1他に所在する余山貝塚（遺跡コード202-001）の確認調査報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助金を得て行う県内主要貝塚確認調査の第1年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。
3. 現地調査は、昭和63年10月3日から同年10月31日まで実施した。
4. 調査及び整理作業、報告書作成に当たっては、(財)千葉県文化財センター研究部長 堀部昭夫、部長補佐 渡辺智信、調査部長補佐 古内茂のもとに、主任調査研究員 太田文雄が担当した。
5. 本書の原稿執筆は太田文雄が行った。
6. 調査の実施に当たっては、銚子市教育委員会より多くの御協力を得た。また、余山町の下記の方々から所有地の借用を御快諾いただくなど、多大な御援助をたまわった。ここに深く感謝の意を表します（敬称略）。
宮内 博 信田和平 根本正治 内蔵正臣 新川義雄 広瀬 博
7. 現地調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸氏から御指導・御協力をいただいた（敬称略）。感謝の意を表します。
小松 繁 小宮 猛 伊藤睦憲
8. 本書に使用した地図は、国土地理院著作・発行の1/50,000地形図（銚子）である。
9. 本書において、遺物実測図縮尺は次のとおりである。土器実測図1/6、土器拓影図1/3、骨角器実測図2/3、貝製品実測図1/3、石器実測図1/3、土製品2/3・1/2、玉類1/1

目 次

序 文 例 言

I. 遺跡の位置と環境	1
II. 調査の概要	3
1. 立 地	3
2. 調査の方法と経過	3
3. 各トレンチの状況	5
III. 遺 構	7
IV. 出土遺物	16
V. ま と め	43

挿 図 目 次

第1図 周辺地形図	2	第14図 土器拓影図	24
第2図 トレンチ配置図	4	第15図 "	25
第3図 遺構配置図	6	第16図 "	26
第4図 B I トレンチ平面・		第17図 "	28
断面図その1	8	第18図 "	29
第5図 B I トレンチ平面・		第19図 "	31
断面図その2	9	第20図 骨角器実測図	33
遺物出土状況図	9	第21図 "	34
第6図 P-6・8 遺物		第22図 貝製品実測図	36
出土状況図	12	第23図 石器実測図	37
第7図 B II トレンチ平面・		第24図 "	39
断面図	15	第25図 土製円盤実測図・	
第8図 C トレンチ平面図	15	玉類実測図	39
第9図 D トレンチ平面図	15	第26図 土製品実測図	41
第10図 土器実測図	17	第27図 明治期の発掘・	
第11図 土器拓影図	18	人骨出土地点図	44
第12図 "	20	折 込	
第13図 "	21	付 図	
		余山貝塚地形測量図	

表 目 次

表 1	トレンチ杭座標	3
表 2	貝サンプル内訳表	10・11
表 3	貝種類別出土率表	42

図 版 目 次

図版 1	1. 貝塚碑	2. 遺跡遠景
	3. A地点近景	4. Aトレンチ
	5. B地点近景	6. B I トレンチ貝層断面
	7. B I トレンチ貝層断面	8. B I トレンチ貝層直下遺物出土状況
図版 2	1. B I トレンチP-11・12	2. B I トレンチP-6 遺物出土状況
	遺物出土状況	
	3. B II トレンチ全景	4. B II トレンチ溝状遺構断面
	5. C地点近景	6. Cトレンチ土壙断面
	7. Cトレンチ全景	8. Dトレンチ全景
図版 3	1. B I トレンチ貝層断面	2. B I トレンチ土壙群全景
図版 4	出土遺物 (土器 1)	
図版 5	出土遺物 (土器 2)	
図版 6	出土遺物 (土器 3)	
図版 7	出土遺物 (土器 4)	
図版 8	出土遺物 (土器 5)	
図版 9	出土遺物 (土器 6)	
図版10	出土遺物 (土器 7)	
図版11	出土遺物 (土器 8)	
図版12	出土遺物 (土器 9)	
図版13	出土遺物 (土器10、土製品・玉類)	
図版14	出土遺物 (骨角器)	
図版15	出土遺物 (貝製品)	
図版16	出土遺物 (石器)	
図版17	出土遺物 (動物遺存体 1)	
図版18	出土遺物 (動物遺存体 2)	解説

I 遺跡の位置と環境

余山貝塚は、千葉県北東端の銚子市余山町353-1他に所在する。

銚子市は、北側を利根川に、南側は太平洋の荒波を受け形成された急崖な屏風ヶ浦によって画され、東には標高73.6mの愛宕山が外洋にせり出している半島地域である。地形上は、半島南部の愛宕山丘陵地と更新世海成段丘及び完新世海成段丘とに分けることができる。更新世海成段丘は、標高50～60mの上位段丘面と、標高30～40mの下位段丘面とがあり、前者は銚子市街地以東の愛宕山周辺に限定され、後者は同市街地以西の東総台地へと広がっている。屏風ヶ浦は上位段丘面を切り崩した段層崖である。完新世海成段丘は、銚子市街地から高神低地及び利根川右岸に形成される標高5～7m程の平坦な低位段丘面で、その外縁部には比高差2m前後の砂丘(砂堆)を形成し、前方には利根川の底地(河成段丘)が開けている。利根川対岸の茨城県側にも同様の低位段丘面と河成段丘が見られる。

余山貝塚は、利根川右岸に広がる低位段丘面外縁部に位置し、南部に広がる上位段丘面から流れ下る高田川の開折により独立丘状を呈す西傾斜面に立地する。この低位段丘面は、25km程上流の小見川町より銚子市まで上位段丘崖下に直線的に形成され、しだいにその幅を広げて銚子市街地にまで至る。国道356号線は、低位段丘面上を縦断する形で東漸している。しかし、当貝塚付近より東に向かうにつれ、低位段丘面は外縁部の傾斜が薄れ、曲線的な出入りが目立ち始め、河口の銚子市街地付近では高神低地と同化する。また、外縁部に発達する砂丘(砂堆)は、野尻町から余山町を経て本城町付近まで伸びているが、四日市場町付近から東側に連なる砂丘は1段階利根川沿いに近く、古い町並みとその砂丘列上に剩っている。

縄文後期中葉から晩期にかけての周辺遺跡の分布状況を見ると、上位段丘面上には、5から17の各遺跡が所在している。このうち、11の榎木内(八祖)遺跡は、縄文時代後期中葉から後半の遺跡で、特に加曾利B3式から曾谷式にかけて良好な資料を提供し、該期の土器編年にも多大な成果をおさめている。余山貝塚と対面する高位段丘上には、7の花倉遺跡、8の塚原遺跡、9の後遺跡などが知られているが、それらは加曾利B式期である。6の篠竹遺跡、10の高野町遺跡も加曾利B式期の遺跡であるが、同時に前者は加曾利E式、後者は縄文早期の遺物の散布が認める。これに対し、低位段丘面上に位置している4の紫崎遺跡などは、加曾利B式期から始まる遺跡であり、低位段丘面上の遺跡に共通している。これら周辺遺跡との関連性を解明していくことは重要である。それとともに、地形的には低位段丘面の形成と貝塚形成との関係を明らかにしていくことも重要であろう。なお、低位段丘面の初源期がおよそ加曾利B式期からであるということは、大きな糸口であるかのように思える。

文1「銚子半島及びその周辺地域の完新世における環境変遷」太田陽子他 第四紀研究第24巻第1号 昭和60

文2『千葉県銚子市埋蔵文化財分布地図』銚子市教育委員会 昭和62

文3『八祖遺跡』岡崎文書・新津健 昭和53

参考文献 『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会 昭和58



- | | | | | |
|---------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 余山貝塚 | 2. 下宿貝塚 | 3. 芦崎橋遺跡 | 4. 柴崎遺跡 | 5. 中之兵遺跡 |
| 6. 篠竹遺跡 | 7. 花倉遺跡 | 8. 塚原遺跡 | 9. 後遺跡 | 10. 高野町遺跡 |
| 11. 榎木内(八祖)遺跡 | 12. 目篠台遺跡 | 13. 坂ノ台遺跡 | 14. 吉越野遺跡 | |
| 15. 出戸遺跡 | 16. 目貝塚遺跡 | 17. 前田遺跡 | | |

第1図 周辺地形図 (1/50,000)

II 調査の概要

1. 立 地

利根川右岸を東西に伸びる標高5～7mの低位段丘面は、下位段丘面である東総台地から流れ下る小河川によりいくつか寸断され、縁辺部砂丘（砂堆）列をつくり、現在の高田町、芦崎町、余山町、柴崎町といった集落が形成される。当貝塚の立地する余山町の砂丘も、西側を高田川、東側は高田川に合流する三宅川の侵蝕を受けて、東西幅600m程に分断され、利根川沖積との比高差4～5mを計る。更に、南側の下位段丘面との間には後背地が広がり、比高差1m程のおぼれ谷が高田川から200m程西に伸びるため、独立丘的な旨きをもっている。

当貝塚は、高田川に沿った西傾斜面に立地し、近年の住宅建設に伴い貝層の全容をうかがうことはできないが、東西130m、南北180mの範囲に貝層が点在する点列貝塚を形成している。残念なことに、主要貝層は昭和34年、道路改修工事の際に基礎用の採土地となり、トロックなどで貝層及び基盤の砂層を搬出する大工事が行なわれたため、その大部分は削平されてしまった（今回の確認調査ではAトレンチを設定精査したが、完璧に壊滅していることを確認できた）。また、高田川の改修・護岸工事等も進み、貝層周辺に大きな影響を与えている。当貝塚と関連する遺物の分布は、高田川、三宅川、南側のおぼれ谷にはさまれる砂丘全面に広がり、高田川対岸でも若干量の縄文後期土器片を採集することができる。更に、砂丘西側を流れる高田川は昔からかなり暴れ川であったとみえ、相当量の遺物を押し流している。

2. 調査の方法と経過

余山貝塚の確認調査は、貝塚の規模、性格、分布状況等の不明確な点を明瞭にし、今後の保護・活用の資料となる成果を得ることを目的とした確認調査である。そこで、地形図・貝層分布図の作成、貝層の状況の把握に主眼を置き、その成果に努めた。

発掘区は4地点を選定し、それぞれ幅3m、

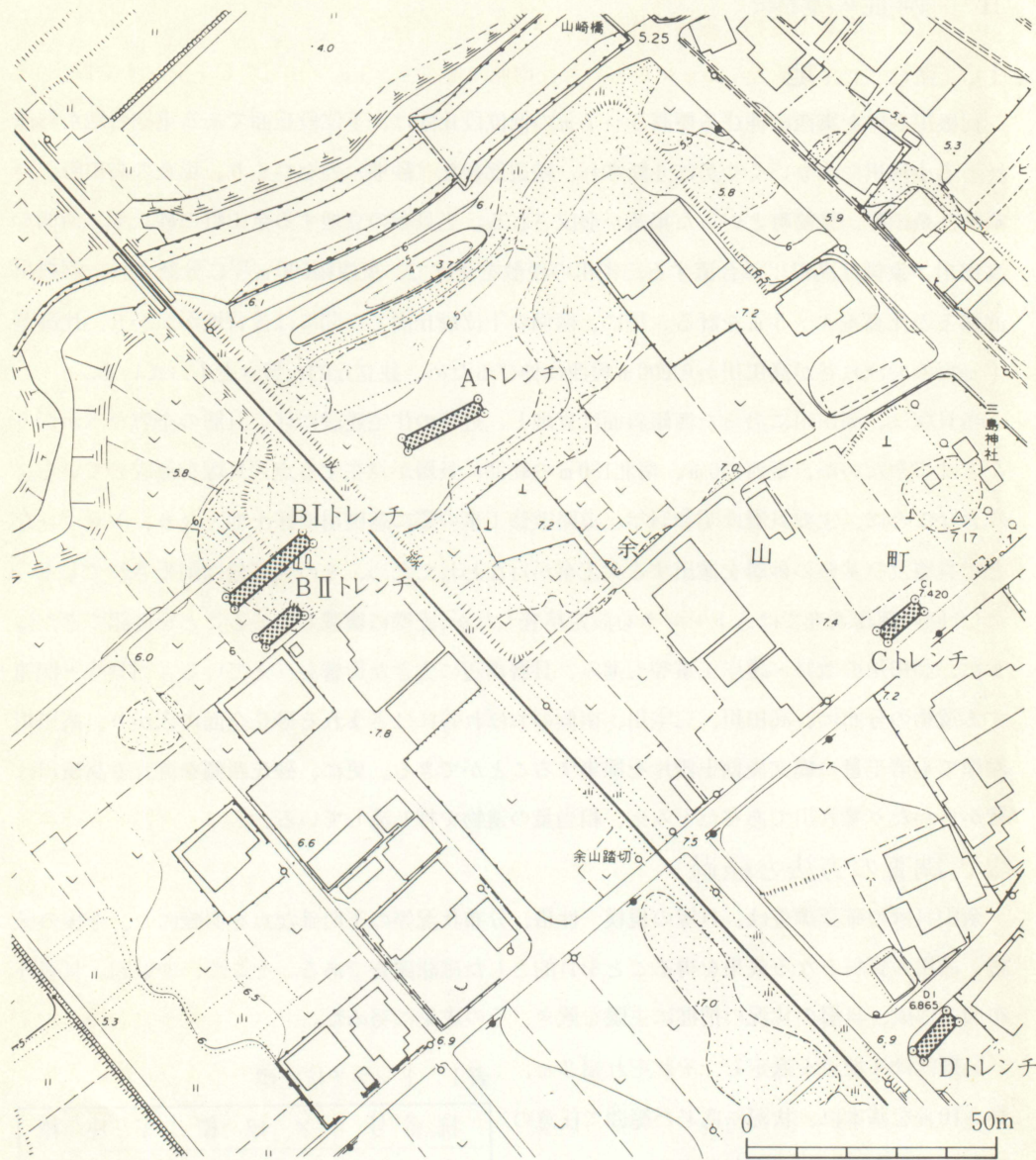
表1 トレンチ杭座標

長さ10mを基本に、状況に応じた範囲で任意のトレンチを設定し、調査を進めることとした。方位は座標北に合わせる事が困難であったため借地の区画方向に合わせた。おおむね北東方向を指している（表1、第2図）

現地調査は、昭和63年10月3日より10月31日までの1カ月に及ぶが、トレンチ設定後は速やかに表土除去に取りかかった。

A地点は、昭和34年に土取りされた地点で、貝層残存の有無を確認するため長目なトレンチ

杭 番 号	× 座 標	Y 座 標
A-1	-27409.672	85449.908
A-2	-27417.636	85434.889
B I-1	-27436.512	85415.296
B I-2	-27449.494	85400.082
B II-1	-27450.575	85414.022
B II-2	-27457.033	85406.387
C-1	-27446.754	85538.216
C-2	-27453.303	85530.659
D-1	-27527.591	85546.539
D-2	-27535.167	85540.011



第2図 トレンチ配置図 (1/1500)

とした。幅3m、長さ16mのAトレンチで、層位を確認するため1m平方のグリッドを増設した。当地点は篠竹が繁茂し、表面観察が困難であったが、枯れ草に混じって貝の散布も認められたことから、破壊をまぬがれた遺構も所在するのではないかと期待させた。しかし、貝殻は表土にまぎれ込んだもので、基盤の黄灰色砂層が10cm程の深さで全面に露呈してしまった。

B地点は、主要貝層南西端の貝層露呈部に当たり、貝層の分布範囲、厚さ、遺構の有無を確認することを目的とした。幅3m、長さ20m及び10mの2本のトレンチを設定し、長いトレン

チをB I トレンチ、短かい方をB II トレンチとした。予想以上に貝層に厚味がなく、攪乱も激しかったが、多量の遺物、遺構を検出し、多大な成果を得た。

C地点は、主要貝層より80m程東方の神社南側の地点で、3m×10mのCトレンチを設定し、遺跡の広がりを確認することを目的とした。

D地点は、更に東方の地点で主要貝層とは120m程離れている。やま3m×10mのDトレンチを設定し、遺跡の広がりを確認することを目的とした。

なお、各トレンチの杭の座標は表1のとおりで、長軸方向北東に向かって左上(北西端・1)と左下(南西端・2)の杭で読んでいる。

3. 各トレンチの状況(第3図)

Aトレンチ

主要貝層部分に設定した3m×16m+1㎡のトレンチである。全域表土は10cm程の攪乱層ですぐに基盤である黄灰色砂層に達する。一部深掘りを入れたが、1m程の深さまで砂層に変化はなく、赤褐色の鉄分を含んだ砂が斑文状に含まれていた。遺物は若干出土したもののすべて表土層中で、昭和34年の土砂搬出に伴ってまぎれ込んだものと思われる。

Bトレンチ

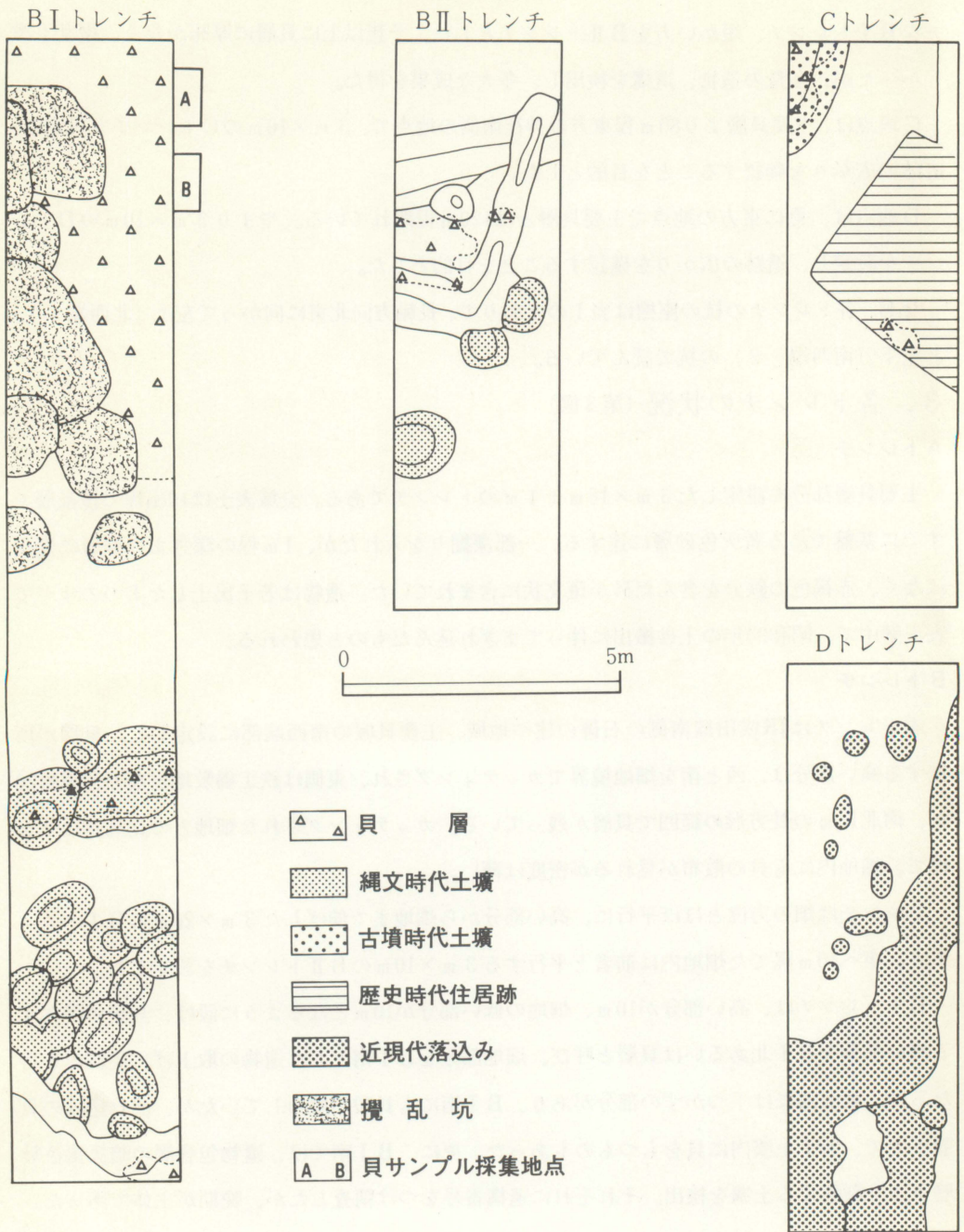
本トレンチはJR成田線南側の石碑の建つ地域、主要貝塚の南西端部に設定した。貝層が所在する高い部分は、西と南を畑地境界でカッティングされ、東側は鉄工場敷地となり、東西20m、南北15mの長方形の範囲で貝層が残っている。カッティングされた畑地との比高差は2m程で、畑地内にも貝の散布が見れるが密度は薄い。

トレンチは畑の方位とはほぼ平行に、高い部分から畑地まで伸ばした3m×20mのB I トレンチと、東へ10m隔てた畑地内に前者と平行する3m×10mのB II トレンチを設定した。

B I トレンチは、高い部分が10m、畑地の低い部分が10mとなるように設け、貝層の所在する高い部分をB I 北あるいは貝層と呼び、畑地部分をB I 南として遺物の取上げ、実測等を行なった。貝層部には手つかずの部分があり、B I 南にも貝殻が散布していたが、流れ込みの貝殻が主で、若干土壌内に貝をもつものもあった。更に、B I 南では、遺物包含層の暗灰褐色砂層下より群集する土壌を検出。それぞれに遺構番号をつけ精査したが、晩期が主体であった。

Cトレンチ

三島神社南側の空地を道路に沿って3m×10mのトレンチを設定した。周囲には住宅が建ち並び、トレンチ設定地点も盛土されていた。隣接する神社境内には貝層があり、縄文期の遺構の広がりが考えられた。盛土及び表土除去後、平安時代の住居跡を検出。トレンチ北側で土層観察のための試堀を実施したが、1枚の間層をもってカキ殻の多量につまる土壌を検出。古墳時代の土師器細片が伴出したことから、該期の土壌と判断した。土壌底は基盤の黄灰色砂層に達していた。



第3図 遺構配置図 (1/100)

D トレンチ

JR成田線余山踏切から南東へ50m程の線路北東側の畑地に3m×10mのトレンチを設定した。東側には小さい谷津が入り、生活廃水が流れる。成田線を隔てた畑地には、シジミ主体の貝層があるが、主要貝層とは時期が異なる歴史時代の所産である。当トレンチでは、遺物はほとんど出土せず、近・現代のものと思われる溝及びピットを検出した。

Ⅲ 遺 構

今回の調査では、貝層部の残存が確認できたこと、低位面には土壌群が所在すること等判明したが、各遺構についてはトレンチごとに触れていきたい。ただ、Aトレンチについては、遺構は所在しないので括愛する。

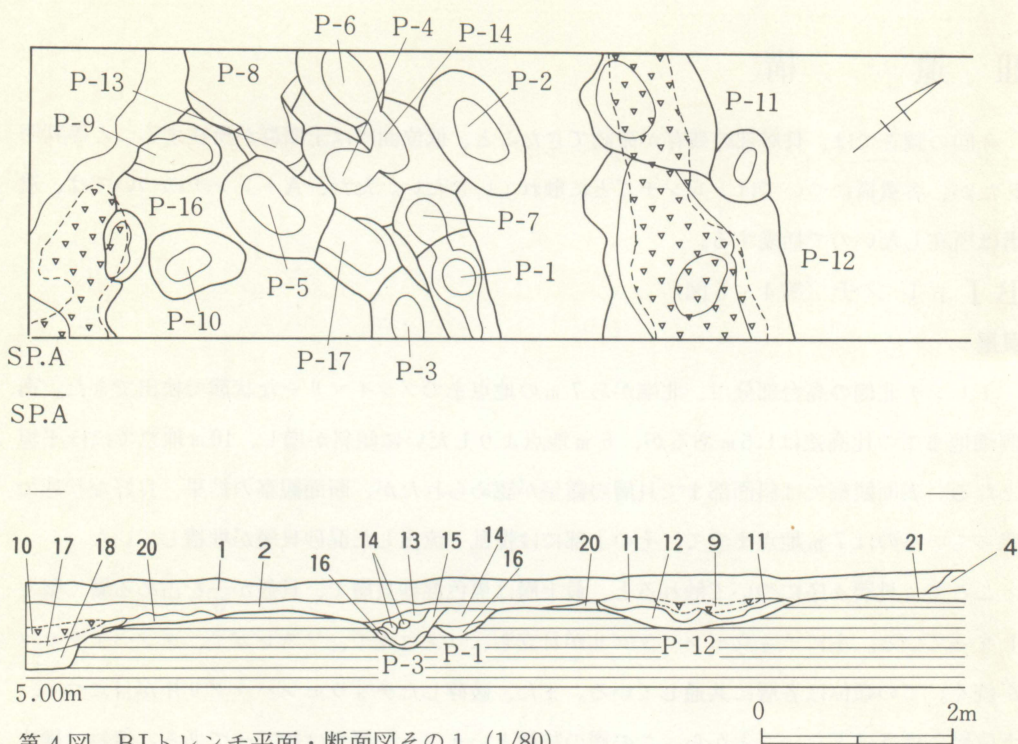
B I トレンチ (第4・5図)

貝層

トレンチ北側の高台部分で、北端から7mの地点までプライマリーな状態で検出できた。南側畑地までの比高差は1.5mあるが、6m地点よりしだいに傾斜が増し、10m地点でほぼ平坦となる。表面観察では斜面部まで貝層の露呈が認められたが、断面観察の結果、良好な状態で残っているのは7m地点までで、その上部には攪乱・流出した混砂貝層が堆積していた。

ここで、貝層々序について触れると、最上層は黒色混砂貝層で、貝殻が $\frac{1}{3}$ を占める層で堅くしまっている。主にチョウセンハマグリが目立ち、コタマガイ、ワスレガイ、ダンベイキサゴが続く。この順位は各層に共通している。また、破碎したチョウセンハマグリ片が目につく。下位層にはさほどないことから、この層の特徴といえよう。厚さは約25cmである。遺物は縄文後期中葉から後半の土器を主体に、骨角器、石器類、動物骨がある。貝層の主体をなす暗褐色混砂貝層は、貝の含有率でA～Cの三層に分けたが、ベースとなる砂は暗褐色砂である。Aは貝の混入が少なくややもろい層で、貝殻の含有率は $\frac{1}{3}$ を下回る。貝サンプルB地点の方に厚さを増している。Bは広範囲に広がる混砂貝層で、貝殻の含有率は4割程を占め、所どころに集中的なまとまりも見られる。傾斜地寸前まで堆積しているが、北から6m程の地点の攪乱層からは上部が流出貝層に覆われ厚さを感じ7.3mで終わる。傾斜地に向かって伸びる貝層といえよう。貝層最下部はCで、A・Bに比べ密度が高く、層全体の色調も貝の量で白っぽく見える。実際含有率が50%を越える部分もあり堅く、しまりのある層といえる。特に下位にチョウセンハマグリを主体とした部分が带状に堆積している。また、3m程の所には、黒色砂層を掘り凹めたような凹地があり、それに沿って貝が密集する。ほとんど貝層を伴わない下部の黒色砂層との境いには、貝殻の密集が特に目立っている。なお、凹みの底面にはさほど貝の堆積がない。この層は貝層下部全域に広がっている。各層の貝類の構成は、サンプルA・Bの内訳表のとおりである(表2)。

砂丘の基盤である黄灰褐色砂層(暗黄灰褐色砂層も含めて)と貝層との間には、黒色砂層が30cmの厚さで堆積しているが、その上部には加曾利B式の大形破片が密集して出土している。この黒色砂層は傾斜部まではほぼ水平に堆積しており、暗褐色混砂貝層Cの凹みから北側に遺物分布があるが、南側からは出土していない。この黒色砂層に遺物が密集することは、明治後半盛んに発掘旅行をくり返した坪井正五郎氏等の報告からもうかがえる。

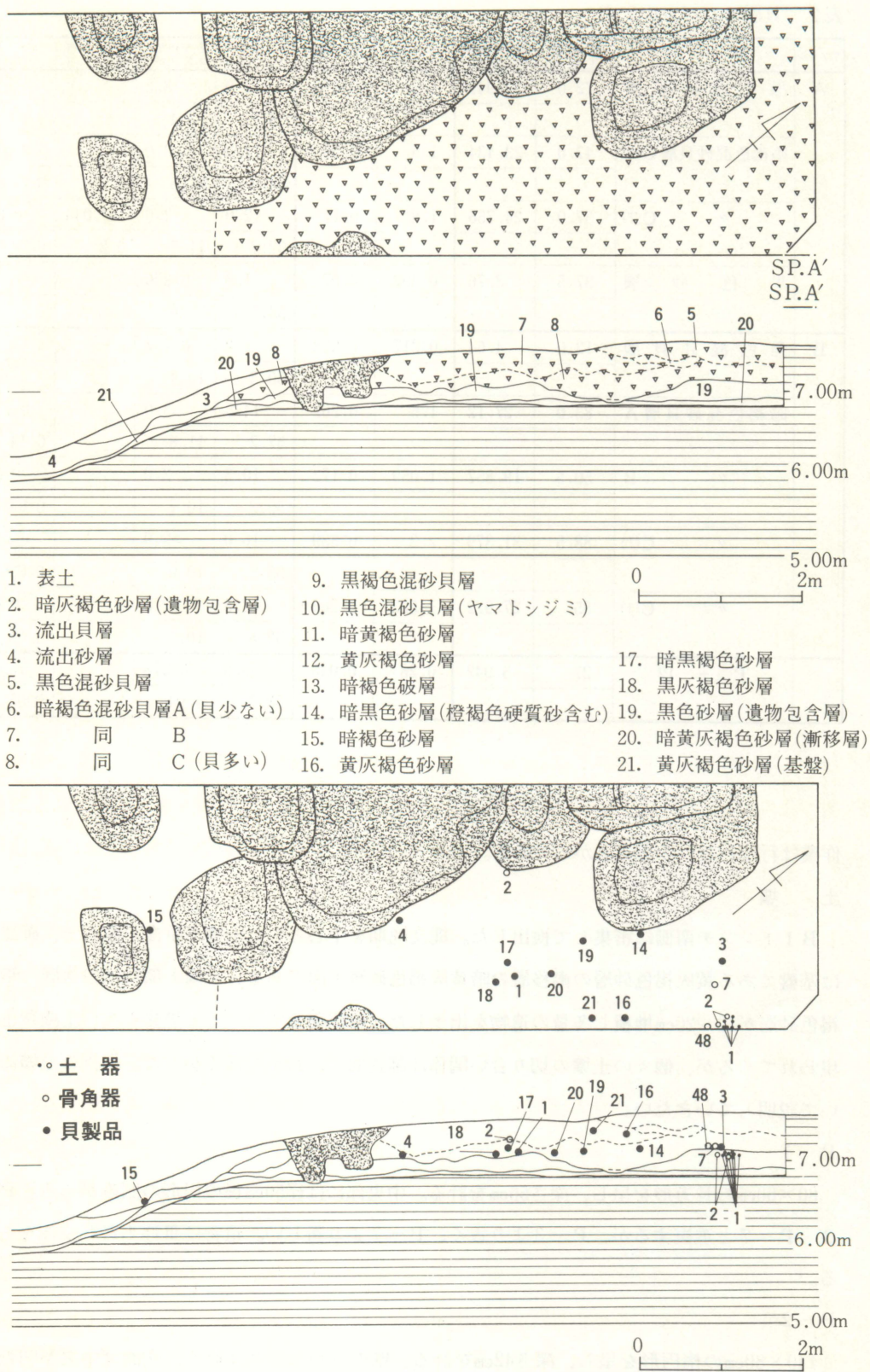


第4図 BIトレンチ平面・断面図その1 (1/80)

貝層の厚さを再度記すと、トレンチ北東端で45cmとなり、ほぼ平均の厚さを示す。黒色砂層に向かって凹むところが最も厚く70cmを計る。遺物の取り上げは、貝層上部と下部とに分け、上部は黒色混砂貝層、暗褐色混砂貝層A・Bにはほぼ相当し、下部は暗褐色混砂貝層Cに当たる。

遺物の出土状況は、貝層部においてはあまりまとまった土器等の出土はなく、また破片がほとんどであった。骨角器については、他の加工痕をもたない骨片との見分けがつきにくかったこともあり、一括して取り上げた中から水洗後に発見する例が多かった。貝製品は加工痕のあるものについては計測して取り上げた。また、攪乱坑からの出土品も多い。黒色砂層内では、ほとんどがその上部に集中し、復原可能な土器も多かった。

貝層部の西側半分は、攪乱坑によって壊されていたが、恐らく遺物の採集を目的としたものであろう。この攪乱坑の深さは、暗黄灰褐色砂層から深いもので1m、浅いものでも30cmで、平均すると80cm前後のものが多い。形状はほぼ円形あるいは隅丸方形で、内部には貝殻とともに土器、骨類等を検出した。ただ、大形品は存在しない。当初、縄文時代の土壌群かと色めき立ったが、坑内を掘り上げるにつれ、磁器、ガラスビンの破片の混入が認められ、覆土もしまりのない状況から攪乱坑であると判明した。更に埋め戻した黄灰色砂層がしまりに堆積しているが、これだけの坑を掘り上げたものにもかかわらず、その量は極めて少ないことから、あるいは、これら攪乱坑は、土壌のような何らかの遺構の部分の掘りおこして、遺物を採集した痕跡ではないかと考える。何もなければ、このような1m前後の規模をもつ穴を掘り、埋め戻す



第5図 BIトレンチ平面・断面図その2(上)、遺物出土状況図(下) (1/80)

表2 貝層サンプル内訳表

サンプル	層位	総重量 (kg)	遺物重量 (kg)	土器	骨類	チョンセン ハマグリ	ワスレガイ コタマガイ	ペンケイ イガ	オシ キミ	ヤマト シジミ
A	黒色混砂貝層	72.0	27.949	1.8	0.356	14.0	3.2			
						54.3	12.4			
	暗褐色混砂貝層C(土)	47.0	23.434	1.5	0.08	12.0	2.0		0.007	△
						54.9	9.15		0.03	△
	" C(下)	57.0	24.756	1.8	0.17	12.0	2.5	0.044	0.05	0.01
						52.7	11.0	0.2	0.22	0.04
黒色砂層	37.5	3.76	0.392	0.07	1.8	0.256				
					54.6	7.76				
B	黒色混砂貝層	13.0	4.64	0.217	0.038	2.2	0.457			
						50.2	10.4			
	暗褐色混砂貝層A	83.0	27.12	1.5	0.262	14.5	3.0		0.035	0.007
						57.2	11.8		0.14	0.03
	" B	50.5	19.857	1.059	0.172	10.3	2.0		0.01	△
						55.3	10.7		0.05	△
	" C(土)	88.5	31.379	2.2	0.339	16.0	2.9		0.025	0.005
						55.5	10.0		0.09	0.02
	" C(下)	85	27.922	1.523	0.269	13.8	2.8		0.02	△
						52.8	10.7		0.08	△
P - 12	27	5.942	0.28	0.038	3.0	0.278		0.003	0.001	
					53.3	4.94		0.05	0.02	

作業は行なわないと思えるからである。

土 壌

B I トレンチ南側に密集して検出した。縄文晩期を中心とした土壌で重複が激しく、確認面は基盤である黄灰褐色砂層の漸移層の暗黄灰褐色砂層上面である。土壌上部には包含層の暗灰褐色砂層が10~20cm堆積し多量の遺物を出土した。確認面まで下げると黒味の強い土壌覆土が現われてくるが、個々の土壌の切り合い関係は確認面ではわかりにくかった。個々の土壌について説明していきたい。

P - 1

80×60cmの長方形を呈し、深さ55cmを計る。中央部には径50cm程の円形の凹みがある。P - 3・P - 7と重複するが、P - 3より古く、P - 7より新しい。遺物はⅢ群土器が主体を占める。

P - 2

140×80cmの楕円形を呈し、深さ42cmを計る。壁の立ち上がりは緩く、底面は中央が凹む。P - 14と重複するが、それよりも古い。遺物は底面付近に集中し、Ⅱ群土器が主体を占める。

アカガイ	イガイ	ダンペイ キサゴ	キサゴ	ミルクイ	ツメ ガイ	アカニン	トカジオリ イレボラ	バイガイ	コゲチャタ ケノコガイ	不明
0.008		0.095	△		0.87	0.2			0.003	7.416
0.04		0.37	△		3.37	0.78			0.01	28.73
0.013	△	0.924	△	0.1	0.054	0.32	0.018	0.005	△	6.409
0.06	△	4.22	△	0.46	0.24	1.46	0.08	0.02	△	29.38
		1.59	0.01		0.128	0.13	0.022	△	△	6.3
		6.98	0.04		0.56	0.57	0.10	△	△	27.59
		0.14	0.003		0.036			0.002	0.001	1.06
		4.24	0.09		1.09			0.06	0.03	32.13
0.004		0.08	0.001			0.12	0.023			1.5
0.09		1.82	0.02			2.74	0.52			34.2
0.016	0.003	1.0	0.01		0.034	0.04	0.017	0.004	△	6.69
0.06	0.01	3.94	0.04		0.13	0.16	0.07	0.02	△	26.4
		0.515	0.003		0.066	0.3	0.129		0.002	5.3
		2.76	0.02		0.35	1.61	0.69		0.01	28.51
0.011		1.15	0.025	0.1	0.084	0.257	0.08		0.003	8.2
0.03		3.99	0.09	0.35	0.29	0.89	0.28		0.01	28.46
	0.005	1.39	0.005	0.1	0.046	0.25	0.103	△	△	7.6
	0.02	5.32	0.02	0.38	0.18	0.96	0.39	△	△	29.15
	0.004	0.16	0.007		0.031	0.1	0.038		△	2.0
	0.07	2.84	0.12		0.55	1.78	0.67		△	35.66

上段は重量(単位kg)
下段は貝類内の割合(%)
△印は極めて微量であることを示す。

P-3

トレンチ外側に入るため規模は不明だが、短軸が70cm程の楕円形プランになりそうである。深さは40cm程である。土層はトレンチ壁の観察から、自然埋没で中位に黒色の砂層を堆積している。遺物は覆土中～下部に多く、Ⅲ群土器を主体としている。

P-4

土壌が最も密集する中央にあり、いくつかの土塊と重複するが、ほぼ140×60cm長楕円形を呈し、深さ40cmを計る。底面は隣接するP-14と同レベルにあり連なる。土層観率でP-5に切れ、P-14とは新旧関係ははっきりしなかった。P-17よりも新しい。遺物は覆土下部に集中しⅢ群土器が主体を占め、大洞系の土器片も混入していた。

P-5

P-4の南側に位置し、120×90cmの楕円形を呈し、深さ45cmを計る。底面はほぼ平坦で壁は緩く立ち上がる。P-17・P-4・P-13と重複するが、それらよりも新しくⅢ群土器が主体を占めている。

P-6 (第6図)

一部がトレンチ外に入るため規模は不明確だが約110×85cmの楕円形プランを呈し、深さ40cmを計る。底面からの立ち上がりは緩い。覆土は最下部にうすく暗褐色砂層が堆積し遺物はほとんどない。中～上部に暗黒色砂層が厚く堆積しその上部に橙褐色の硬質砂を混入する暗黒褐色砂層がある。更に暗褐色砂層がのる。遺物は暗黒色砂層下部に集中し、石剣(第24図1)も出土している。Ⅲ群土器が主体である。

P-7

P-1・P-4・P-14と重複する径70cm程の土壌で、深さは30cmを計る。底面は楕円形を呈し、ほぼ平坦である。P-1よりも古く、遺物はP-4寄りの底面に集中した。Ⅲ群土器を主体に出土した。

P-8 (第6図)

トレンチ壁付近に位置するため形態は不明瞭だが、120cm前後の円形プランを呈すと思われる。P-6・13を切り、トレンチ南端の溝状の落ち込みに切られる。底面はやや凸凹があり壁の立ち上がりはダラッとしている。覆土はP-6で確認された橙褐色の硬質砂を混入する暗黒褐色砂層が最下層で、覆土中部に暗黒色砂層を堆積する。遺物は土器、石器、骨角器が多量にあり、主に土壌中～下位に集中している。Ⅲ群土器を主体とするが、Ⅳ群土器も出土した。

P-9

南半は溝状の落ち込みに切られるが、長軸方向が90cmまで残り、短軸は60cmである。ほぼ長楕円形を呈すと思われる。深さは約20cmで浅い土壌である。Ⅲ群土器を主体とする。

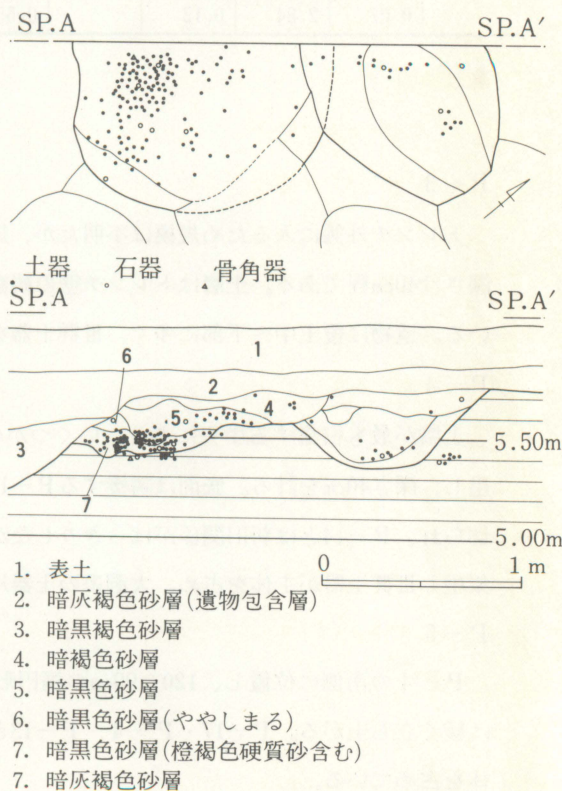
P-10

100×60cmの卵形を呈し、深さ30cmを計る。壁の立ち上がりは緩い。遺物量は多く、土器片が重なるように出土した。Ⅲ群土器が主体である。

P-11

表土除去した段階で貝層が带状に検出できた。P-12とほぼ同時に埋没しており、底面が2ヶ所になったため、一応土壌として取り扱ったが、溝状の遺構である可能性も残る。

南北130cm、東側はP-12と接し、底面が20



第6図 P-6・8 遺物出土状況図

cm程深くなる。底面は南側に片寄り楕円形を呈す。壁の立ち上がりは、南側が急で、北側は非常に緩い。貝層は覆土上面に薄く堆積し10cm程の厚味をもっている。遺物は、貝層及び貝層下に集中する。ほとんどが細片で、I群土器を主体としている。

P-12

P-11の東側に接し、南北2m、東西も2m余である。底面までは30cmの深さがあり、浅い皿状の断面形を示す。底面中央には50×30cm、深さ20cm程の小ピットがある。やはり覆土上面に貝層が薄く堆積し、骨、土器が貝層下部から多く出土している。中には大形破片も見られる。土器はI群土器が主体で、P-11と同時期のものと思われる。

P-13

短軸65cmの楕円形を呈し、深さ25cmを計る。P-8・P-15と重複している。Ⅲ群土器が土壙全域から重なるように出土した。ほとんどが細片である。

P-14

P-4と隣接し、P-2を切る130×75cmの楕円形の土壙で、深さ40cmを計る。遺物は覆土下部に集中し、Ⅲ群土器が主体を占める。

P-16

溝状の落ち込みに南半部が切られる楕円形の比較的小さい土壙で、底面に集中して遺物を出土した。Ⅲ群土器を主体とするが、Ⅴ群土器も上部より検出された。

溝状遺構

トレンチ南端に位置し、南に向かって傾斜している。底面は発掘区南側になるようで、かけ上がりの部分しか確認できなかった。トレンチ南東コーナーには、当遺構の覆土上面に散布するシジミの貝層があり、その分布はBⅡトレンチ方向に伸びている。覆土中からは、混入品と思われる縄文土器片が数点出土したが、遺物はほとんどなく、また、縄文晩期の土壙を切っていることから土壙群とは関連のない遺構である。なお、包含層中に古墳時代から歴史時代の土師器、須恵器が若干出土していることから、古墳時代以降の溝状遺構と考えられる。

BⅡ トレンチ (第7図)

土 壙

P-1

長軸西側がトレンチ外になるため規模は不明確だが、長軸110cm強、短軸120cmの楕円形を呈し、深さ40cmを計る。壁の立ち上がりは緩い。遺物はⅢ群土器が主体だが量的には少ない。

P-2

径85cmの円形を呈し、深さ20cmと浅い。溝状遺構に北端部を切られる。遺物量は少なく、Ⅱ～Ⅲ群土器を若干出土した。

P-3

P-2に隣接し、溝状遺構に切られる。90×60cmの楕円形を呈し、深さは15cm程度の浅い土壇である。I群土器を出土したが、量的には少ない。

溝状遺構

トレンチ北半に2条検出した。1条はトレンチを横切る浅い溝で、もう1条は鍵の手状に直角に折れる深い溝で前者を切っている。浅い溝は皿状の断面形を呈し、深さは25cm程度。覆土中に若干量のシジミを混入する。深い溝はトレンチ長軸方向に4m伸び、急に右へ降れてBⅡトレンチ方向へ伸びる。溝の左側壁は急傾斜で立ち上がるのに対し、右側の壁は底面からしばらくは急傾斜に立ち上がるが、途中から緩やかに上昇して浅い溝と接していく。深い溝の覆土上面には厚さ10~15cmのシジミ純貝層があり、中程の層にもシジミが若干混入している。このシジミの貝層はBⅠ南の溝状遺構でも確認しており、一連の溝と考えて良いようである。遺物はほとんど出土していないが、包含層中に縄文土器とともに土師器片が出土していることから古墳時代以降と考えて良いであろう。

C トレンチ (第8図)

土 壇

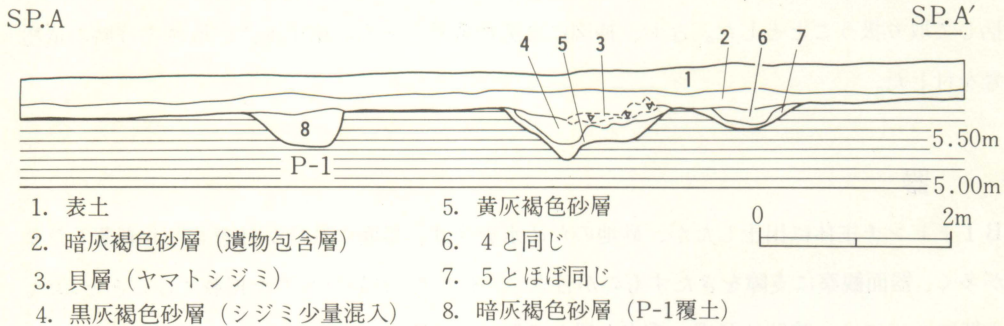
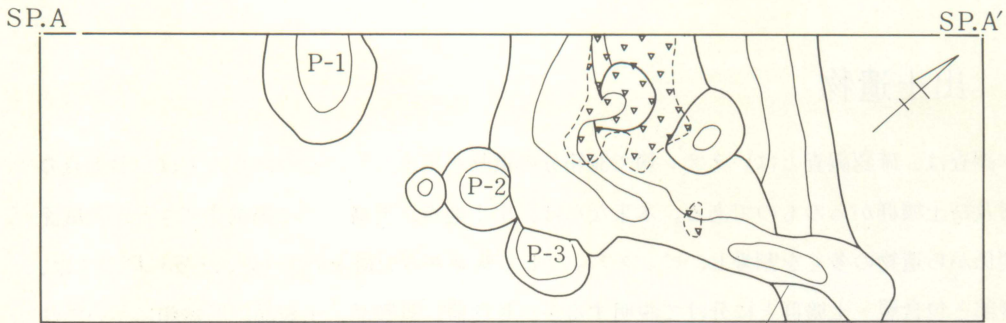
トレンチ北西コーナーで層序確認のための試験掘りで検出したもので、竪穴式住居確認面より10cm程の間層(黄褐色砂層)をもってその下部に掘り込まれている。形状は不明だが、深さ70~80cm程の土壇となろう。覆土中には多量のマガキが堆積し、それとともにクジラと思われる大きい椎骨が出土した。土器片は少なく古墳時代後期の杯・甕の破片が若干出土しただけである。

竪穴式住居

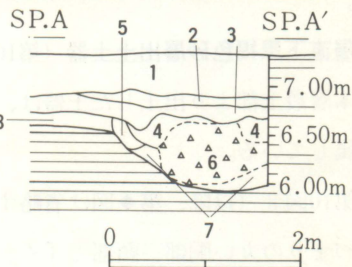
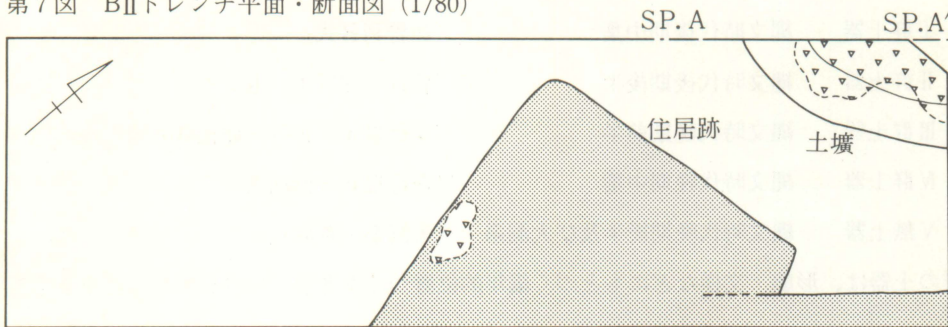
1辺約8mの竪穴式住居で、表土下40cmの黄褐色砂層上面でプランを確認した。東壁中央付近には75×35cmの範囲でシジミの集中するところがあり、土師器片も出土している。覆土は黒褐色砂層である。更に、トレンチ北東コーナーからトレンチに沿って溝が伸びているが、トレンチ際を通る道路に伴うものと思われる。なお、住居跡はプランを確認しただけで完掘はしなかった。なお、縄文の土器片はさほど多く出土しなかった。

D トレンチ (第9図)

本トレンチも表土除去後、黄褐色砂層上面でプラン確認をするだけにとどめた。近・現代の溝状遺構とピットを検出した。遺物は陶磁器等が主で、縄文土器はⅡ群土器1点のみであった。遺物の分布はあるもののかなり希薄な地点といえよう。

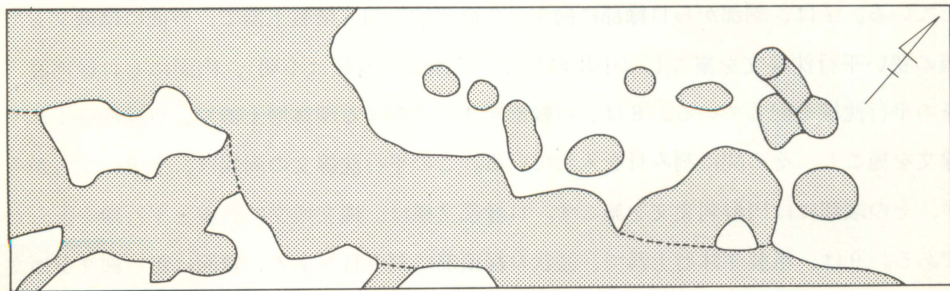


第7図 BIIトレンチ平面・断面図 (1/80)

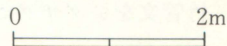


1. 表土
2. 黒褐色砂層
3. 黄褐色砂層 (住居跡確認面)
4. 黒褐色砂層
5. 黒色砂層
6. 黒色混砂貝層 (カキ主体、海獣骨含む)
7. 暗黄灰色砂層
8. 暗灰褐色砂層

第8図 Cトレンチ平面図 (1/80)



第9図 Dトレンチ平面図 (1/80)



IV 出土遺物

本調査は、確認調査とはいえテン箱で30箱分の遺物が出土した。そのほとんどは、B地点の貝層及び土壙群からのものである。本来ならば、出土地点、遺構ごとに掲載すべきだが、紙面の関係から遺物の多くを割愛し、ピックアップして載せざるを得ない。一応、土器に関しては、貝層部と包含層・土壙群とに分けて説明するが、骨角器、貝製品、土製品、石器類については一括して取り扱うこととした。なお、挿図には遺物番号とともに出土地点、取り上げ時の遺物番号を付した。

土 器

B I トレンチ主体に出土したが、砂地のため水を受け、器面に鉄分が付着したり剥落したものが多く、器面観察に支障をきたすものが目立つ。そこで、良好なものを掲載することとした。

土器については、時間的経過に重点を置き I 群から V 群までの大別を行なった。

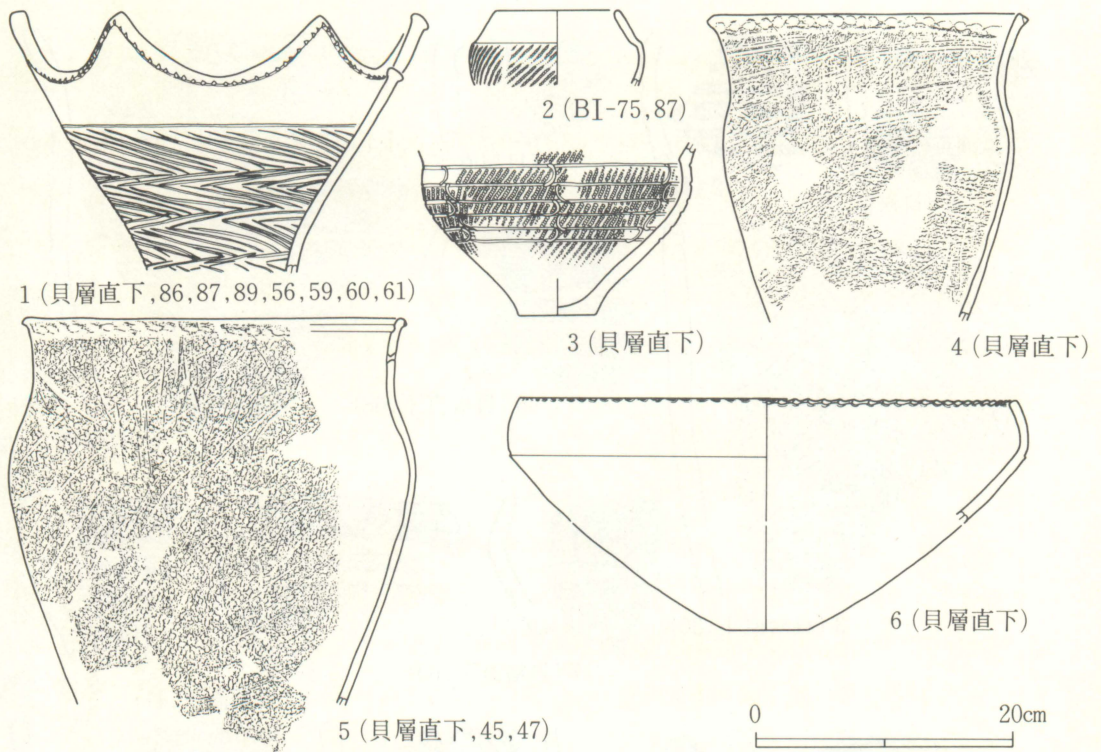
I 群土器	縄文時代後期中葉	(加曾利 B 式)
II 群土器	縄文時代後期後半	(曾谷・安行 I・II 式)
III 群土器	縄文時代晩期前半	(安行 III a・III b・姥山式)
IV 群土器	縄文時代晩期中葉	(安行 III c・前浦式)
V 無土器	縄文時代晩期後半及び大洞系	(大洞系・荒海式)

各群の土器は、形態・文様などにもとづく編年的位置づけを考慮して触れていくこととした。

貝層直下黒褐色砂層出土土器 (第10・11図、図版4・13)

本層最上部より出土した土器は、B地点の貝層が形成される直前の所産で、すべて I 群土器に属している。

第10図3 (以降、第◆図は省略する) は、鉢形土器で口縁部を欠いているが、小さい底部に寸づまりの丸い胴部、頸部で「く」の字状に折れて外反する口縁部へと移行する。頸部から胴中半までは、縄文を地文に平行沈線文とそれを区画する孤線文を配している。口縁部は縄文を施文している。7 は、胴部から口縁部に向かって直線的に開く精製土器で、外面には縄文を地文に幅の狭い平行沈線文を施こし (小片のため、区画文の有無は不明)、内面にも口縁部直下に4条の平行沈線を配している。8 は、口縁部がやや内湾する深鉢形土器で、口縁部直下に平行沈線文を施こし、その間に刻み目を入れている。この平行沈線文の両端は、上下にずれかみ合わず、その端部には円形刺突文を施こす。口縁部文様は、縄文地文に孤線と平行線を配したものである。9 は、粗製深鉢形土器で、波状口縁頂部に刻み目がある。器面は粗い縄文を地文にし、竹管文をジグザグに垂下している。

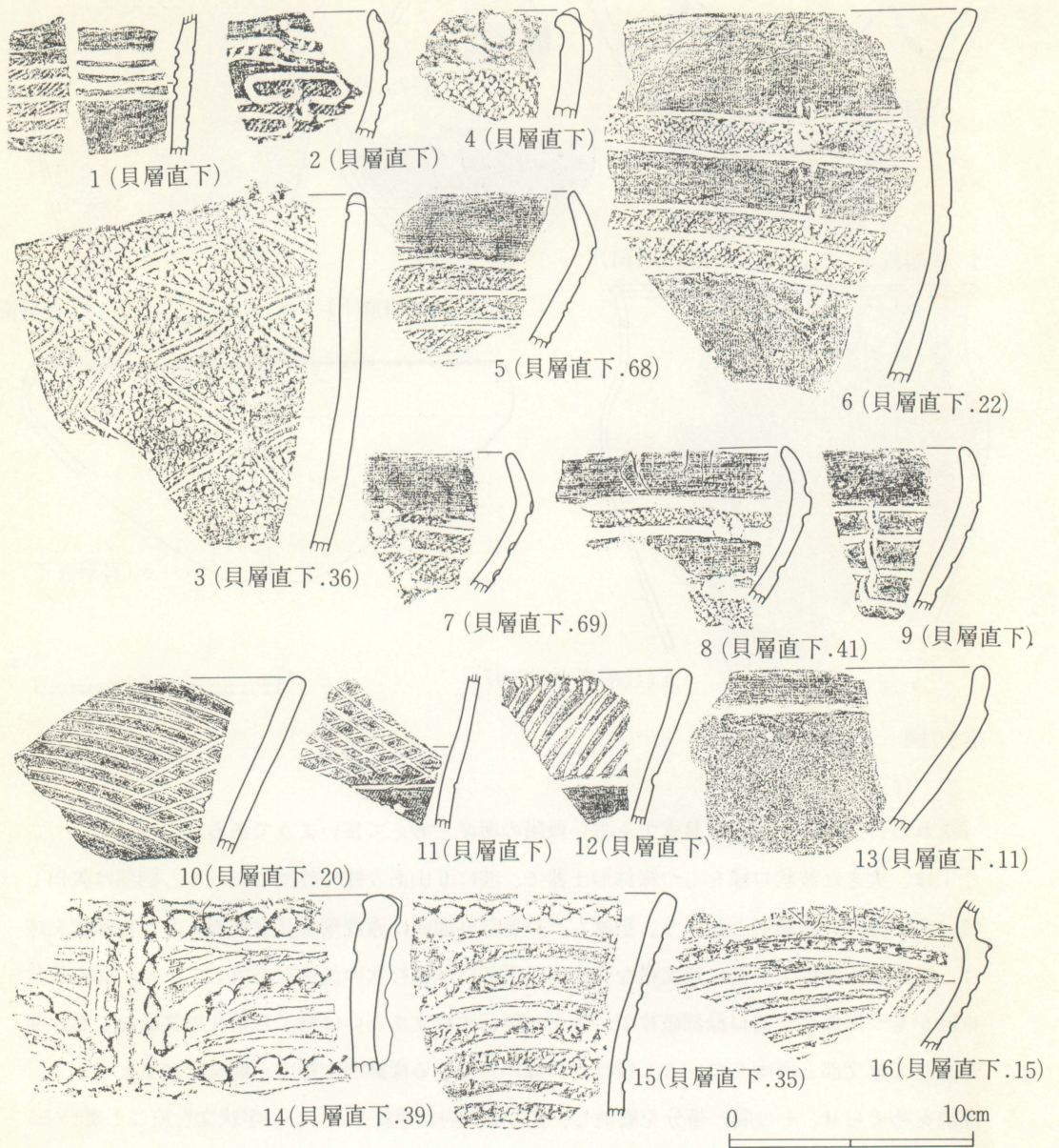


第10図 土器実測図 (1/6)

これらの土器は、加曾利B式でも古い段階の所産と考えると良いようである。

1は、大きな波状口縁をもつ深鉢形土器で、波は6山あり強く外反している。胴部は欠損しているが短い円筒形となろう。肥厚した口唇部外面には連続刻み目文を施こし、口縁部文様は、横走る沈線で上部に無文帯をつくり、下部には稜杉状の沈線を充填している。16も波状口縁をもつ深鉢形土器口縁部破片で、上半に斜行沈線文あるいは格子目状沈線文を施こし、横走沈線で無文部と区画している。12は、口縁の外反する深鉢形土器で、縄文を地文とする平行沈線をめぐらせ、その間一帯分を磨消し、更に縦方向に連続した「い」字状文を施こしている。11・13～15は、内弯あるいは内傾する口縁部をもつ土器で、口縁部最大径以下に縄文を地文とした平行沈線文をめぐらせたり、無文地のものがある。「い」字文をもつもの(14・15)や列点文を施こすもの(13)がある。18は、口縁部に斜行沈線文を施こし、横走沈線で無文部と区画している。2は、小形碗形土器で、強く内傾する口縁部は無文、張りのある胴部には縄文を施こしている。焼成は良好で黒褐色を呈す。6及び19は、無文の浅鉢形土器で、6の口縁部は内弯し口唇部に刻み目をもち、19の口縁部は外傾する。10は、口縁部に粘土紐を貼付し、以下は縄文となる。口唇部にはボタン状の貼付文を付す。

以上の土器は、加曾利B2式に相当するもので、1は当貝塚から同様の完形品が出土していることは古くから知られている。



第11図 土器拓影図 (1/3)

22は、台付鉢形土器で「く」の字状に折れる体頂部は、平行沈線で更に強調され、沈線間は連続刺突文を施す。体部には斜行沈線を、外反する竹縁部には無文部がある。この土器は、加曾利B 3式と考えられる。

粗製深鉢形土器のうち、4・5は復元可能なもので、破片の20・21を含め紐線文をもち、頸部がくびれた器形を示す。4は、粗い縄文を地文にし竹管状工具による粗い斜行沈線を施す。5も同様な文様となり、口縁内面に1条の太い沈線をめぐらせている。なお、口唇直下に補修孔と思われる穿孔がある。20は、平行沈線を地文として、紐線文で直線、曲線の文様を表出し

ている。口縁内面には2条の太い沈線をめぐらせている。21は、縄文を地文に平行沈線を施こしている。

これらの土器は、加曾利B式の粗製深鉢形土器であるが、4・5は古い段階のものとなるようである。

貝層内出土土器（第12・13図、図版5・6）

貝層は4層に分層できたが、それぞれの層位には攪乱等が多く、上下が混在している可能性が強いため、一括して扱うこととした。I・II群土器が認められるが、主体はI群土器である。

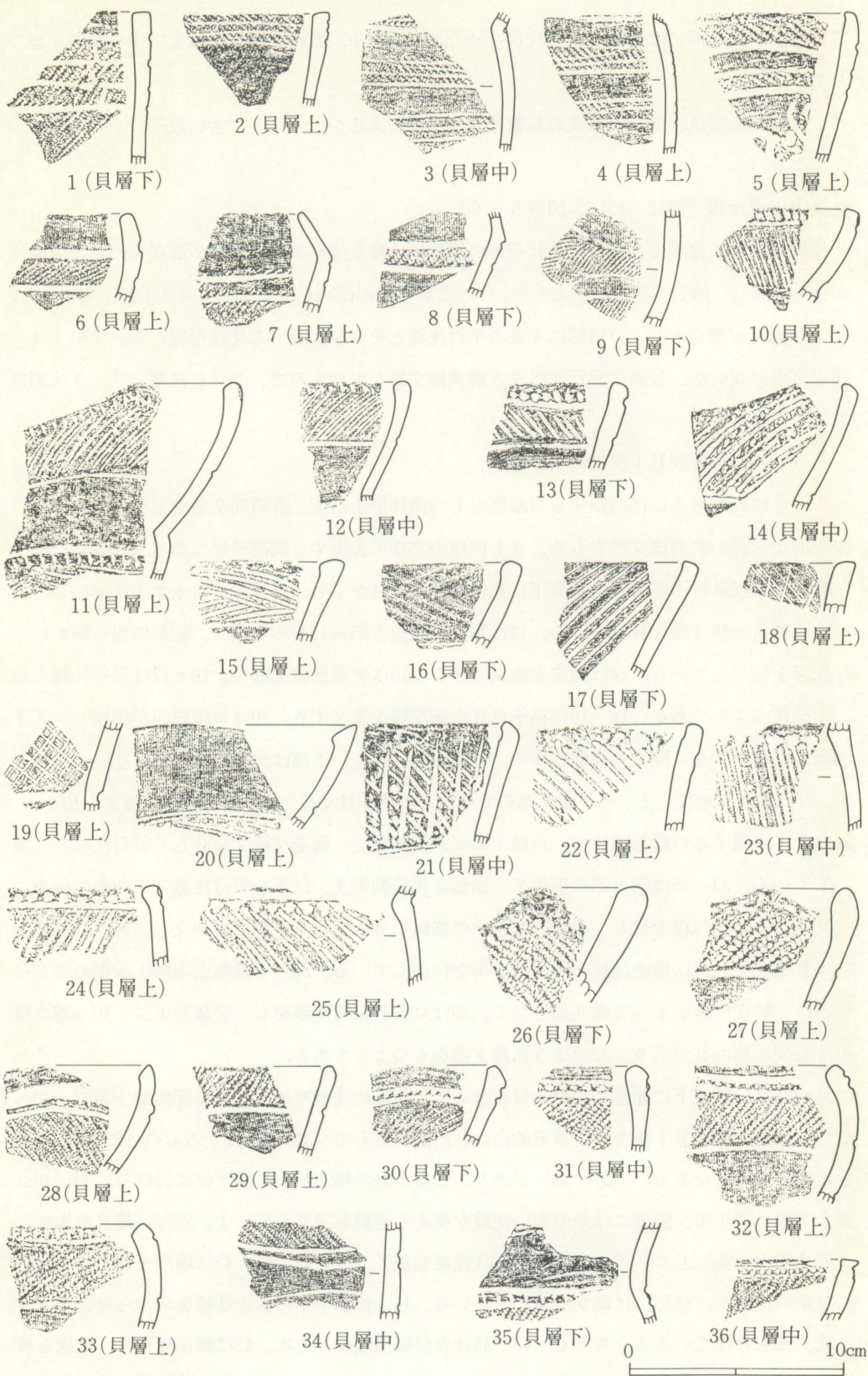
1は縄文を地文とし、口縁部に4条の平行沈線とそれを区画する沈線を施こす。2～4は、沈線区画はないが、数条の平行沈線文と磨消縄文帯をもつもので、2は口縁部、3・4は胴部破片である。

これらは、加曾利B1式に相当しよう。

5～8は内湾あるいは内傾する口縁部をもつ深鉢形土器で、磨消縄文帯をもつ。5は下位に曲線的な区画の磨消縄文帯をもち、9も同様の文様で表現する胴部破片である。10～14は波状口縁をなす深鉢形土器で、口唇直下に連続した刻み目をもち、口縁部は横走する沈線により斜行沈線文帯と無文帯を分けている。11は頸部に沈線と刻み目をめぐらせ、胴部に粗く短かい平行沈線を施こしている。14は縄文を地文とする。15は矢羽根状沈線を、16・17は斜行沈線を施こす平縁のようである。18・19は格子目状に細沈線を施文する。20は口縁内面が肥厚し、若干内湾しながら大きく開く口縁部破片で、口縁上部は無文、下部は矢羽根状沈線となるようである。21は縄文を地文とし、ヘラ状工具の先端による格子目文を、22は矢羽根状沈線文を施こす。24は若干内傾する口縁部破片で、口縁上端に連続刺突文、横走沈線文を介して斜行沈線文を施こしている。23・25は胴上部の破片で、頸部に連続刺突文、以下を斜行沈線文で埋めている。

26～28は波状口縁を呈し、全体的に厚目の器肉をもっている。縄文を地文に、26は口縁部上端に刺突文を、27は横走沈線により無文帯を作出している。28は口縁部上端に1cm程の無文帯を設け、横走沈線をもって縄文部となる。29は口縁部に縄文帯をもつ深鉢形土器、30～32は横走沈線間に刻み目が入り、32のように無文部をもつようである。

33～38は口唇直下に連続した刻み目を施こし、下位に沈線をめぐらせる深鉢形土器で、30～32の口縁部文様と若干異なる。器形的には、内傾するもの(33)、外反するもの(35・36)、大きな波状口縁となるもの(37・38)があり、ともに磨消縄文帯を口縁下位に設ける。39・40は胴上半部の破片で、頸部にはやや太い沈線を横走し連続刺突文を施こす。胴部は縄文を地文に平行沈線文を施こしている。39は更に波状沈線を垂下している。41・42は碗形土器で、口縁部に数条の沈線を、体部には縄文を施こしている。42は体部中半に横走沈線をめぐらせ、無文部と縄文部を分けているようである。43～45は台付鉢形土器である。43は脚部破片で、沈線を横走している。44・45は「く」の字状に屈折した体頂部に刻み目を施こし、無文帯を頸部に残し



第 12 図 土器拓影図 (1/3)



第 13 图 土器拓影图 (1/3)

て斜行沈線文の口縁部となる。体部は短かい平行沈線文である。46～49は浅鉢形土器で、46・47は外反する口縁部に縄文を施す。48・49の口縁部は無文であるが、体部との境に段をつくっている。

以上の土器は、加曾利B 2及びB 3式に該当するものと思えるが、33以降の方が若干新しい部類に含まれるように思える。

50～54はコンパス文風の磨消縄文をもつ土器で、50は小形品、頸部に沈線と刺突文を施し、鎖状の磨消縄文帯で胴部を被う。51は頸部の沈線間に連続刺突文を施し、コンパス文で胴部を飾っている。53・54も同様で、52は孤線が横に伸び沈線の区画も不明瞭である。55・56は碗形土器の口縁部で、無文地に数条の平行沈線文を施している。57は数条の平行沈線を口縁部にめぐらせ、更に縦長瘤を貼付している。58は肥厚した縄文帯をもつ帯縄文土器である。

以上の土器はⅡ群土器で、50～57は曾谷式土器の特徴をよく示している。58は1点のみの出土であり、混入した可能性もあるが、貝層内では最も新しい時期のもので安行Ⅰ式に該当しよう。

59～66は粗製深鉢形土器で、59以外はいわゆる紐線文土器で、口縁部内面に太い沈線を横走するもの(62・63・65)もある。すべて縄文を地文とし、沈線文を描いている。59の口縁部は短かく内弯し、刻み目を施す。

これらの粗製深鉢形土器はⅠ群土器に伴うものであろう。

土壌及び包含層出土土器(第14～19図・図版7～12)

B地点の土壌及び包含層からは、多量の縄文土器が出土した。本来、遺構ごとに説明すべきであるが、ここでは時期ごとの記述をしたい。

Ⅰ群土器(第14図1～第15図30、図版7・8)

加曾利B式土器も一括した。

1・2は大きい波状口縁をもつ深鉢形土器で、口縁内面が肥厚し、波頂部は鋭角的に突き出している。口縁端部に1・2条の沈線をめぐらせ連続した刻み目を施す。口辺部上半は縄文、下端は無文帯となる。3も磨消縄文帯をもつ波状口縁だが、波の振幅が小さく口縁部も肥厚しない。4は縄文を充填した平行沈線間に「い」字状文を施している。5も同様なものかもしれない。6～9は沈線文をもつもので、斜行沈線(6)、格子目状沈線(7・8)、横走沈線のみ(9)とがあり、平行沈線による無文帯をはさんで胴部にも同様の文様が展開するものと思われる。10～12は口縁端が若干内傾する土器で、縄文を地文としている。10は平行沈線を3条横走し、2本1対の刻み目のある粘土紐を貼付している。11・12は刻み目文を施す。13～16は碗形土器で、口縁部に沈線文、体部は縄文を施す。16の口縁部は小さく外反する。17・18は台付鉢形土器で、体部が「く」の字に屈折し、外反する口縁をもつ。体部文様は17が短かい孤状の平行沈線、18は磨消縄文と平行沈線文である。19・20は無文浅鉢形土器で、口縁部と体

部の境に段をつくる。口縁部は内弯し、20は口唇部に刻み目を施こしている。26は鉢形土器であろうか、無文である。27～29は碗形土器で、口縁部に小突起を付し、そこを起点に曲線区画による縄文帯をつくっている。30は鉢形土器の内傾する口縁部破片で、口縁端部に刻み目文、口辺部には孤線文区画による縄文帯を設けている。21～25は紐線文をもつ粗製深鉢形土器で、地文として縄文を施こし、孤状の平行沈線を引いている。

以上、これらの土器は加曾利B 2～B 3式に含まれる土器と考えられるが、10についてはやや後出的な土器かも知れない。

Ⅱ群土器（第15図31～第16図50～57、59～61、64、67、70、72、第17図77～81、図版8・9）

曾谷式から安行Ⅱ式までを一括した。

31～49は波状、コンパス文状、レンズ状等の沈線区画による磨消縄文帯をもつ土器である。

31～34は頸部に木口状の施文具の先端を立てて連続刺突した刻み目がめぐる。刻み目の個々の形状は三角形を呈す。口縁部に沈線区画による縄文帯をもつようだ（31・34）。また、胴部文様は連鎖状の磨消縄文（32）やコンパス文風のもの（33）がある。35は大きな波状をなす磨消縄文、36～38も同様であろうか。39はレンズ状の文様で、円内には縄文を充填している。ただ、器面が粗れているため不鮮明である。44・45は小形品で、コンパス文風の磨消縄文を施こす。46・47は碗か鉢で、口縁部には数条の平行沈線がめぐる。46は縦長瘤が付されていた痕跡がある。48・49は台付の脚部で、48は沈線区画による縄文帯があり、更に破片両端に焼成前の穿孔が認められる。49は中位に横走沈線が走る。

以上、これらの土器は曾谷式と考えて良いであろう。

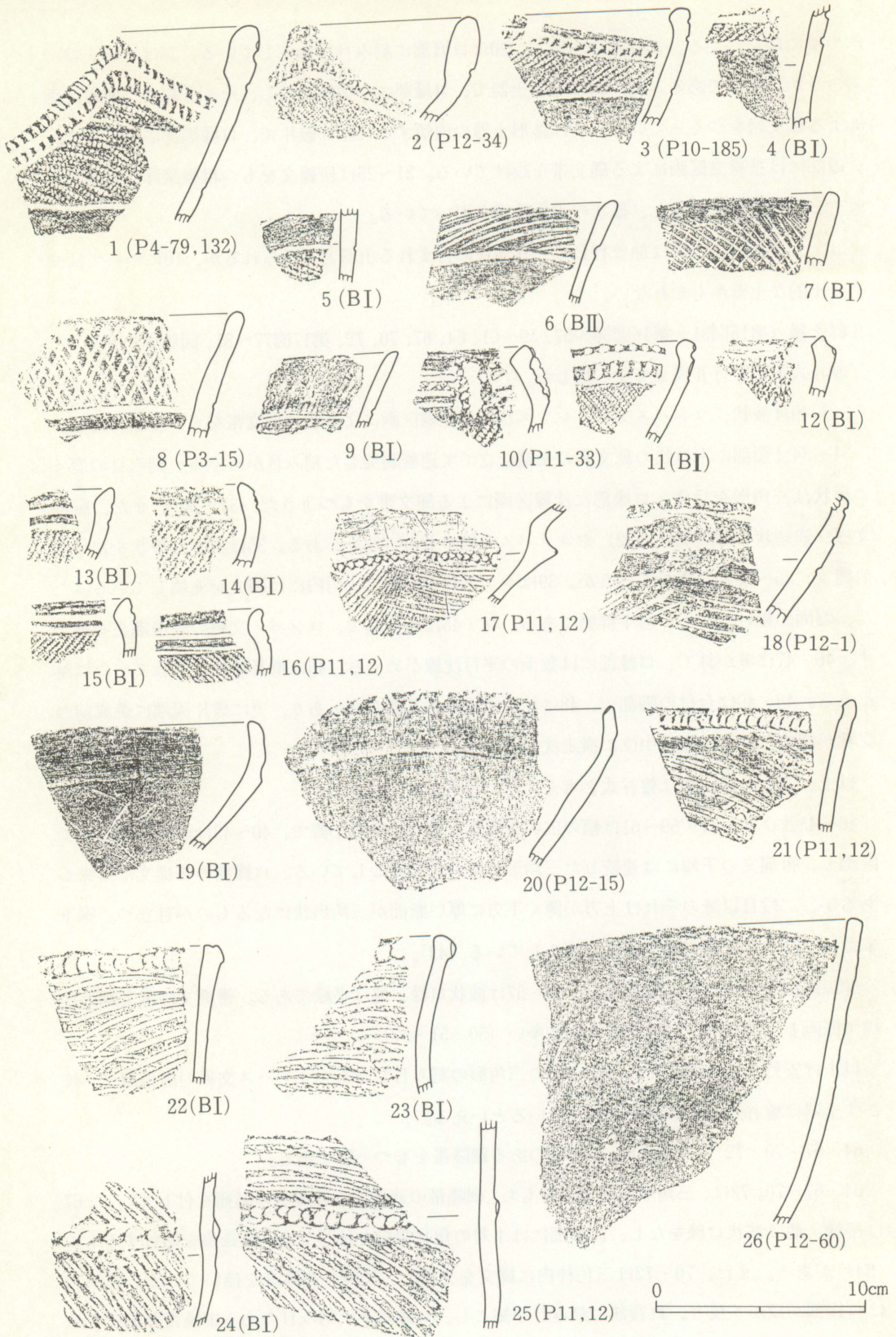
40～43及び50～57・59～61は幅の広い帯縄文をもつ深鉢形土器で、40～43は無文部を沈線で区画し、帯縄文の下端には連続した三角形の刻み目を施こしている。口縁部の帯縄文は厚味があるが、二段目以降のそれは上方が薄く下方に厚い断面が三角形になるものが目立つ。胴下半にはコンパス文風の磨消縄文を施こしている（43）。

50以降は平行する帯縄文をもち、56・57は波状口縁、他は平縁である。帯縄文は無文部と沈線で区画し、縦長瘤を貼付するものも多い（50・51・57）。

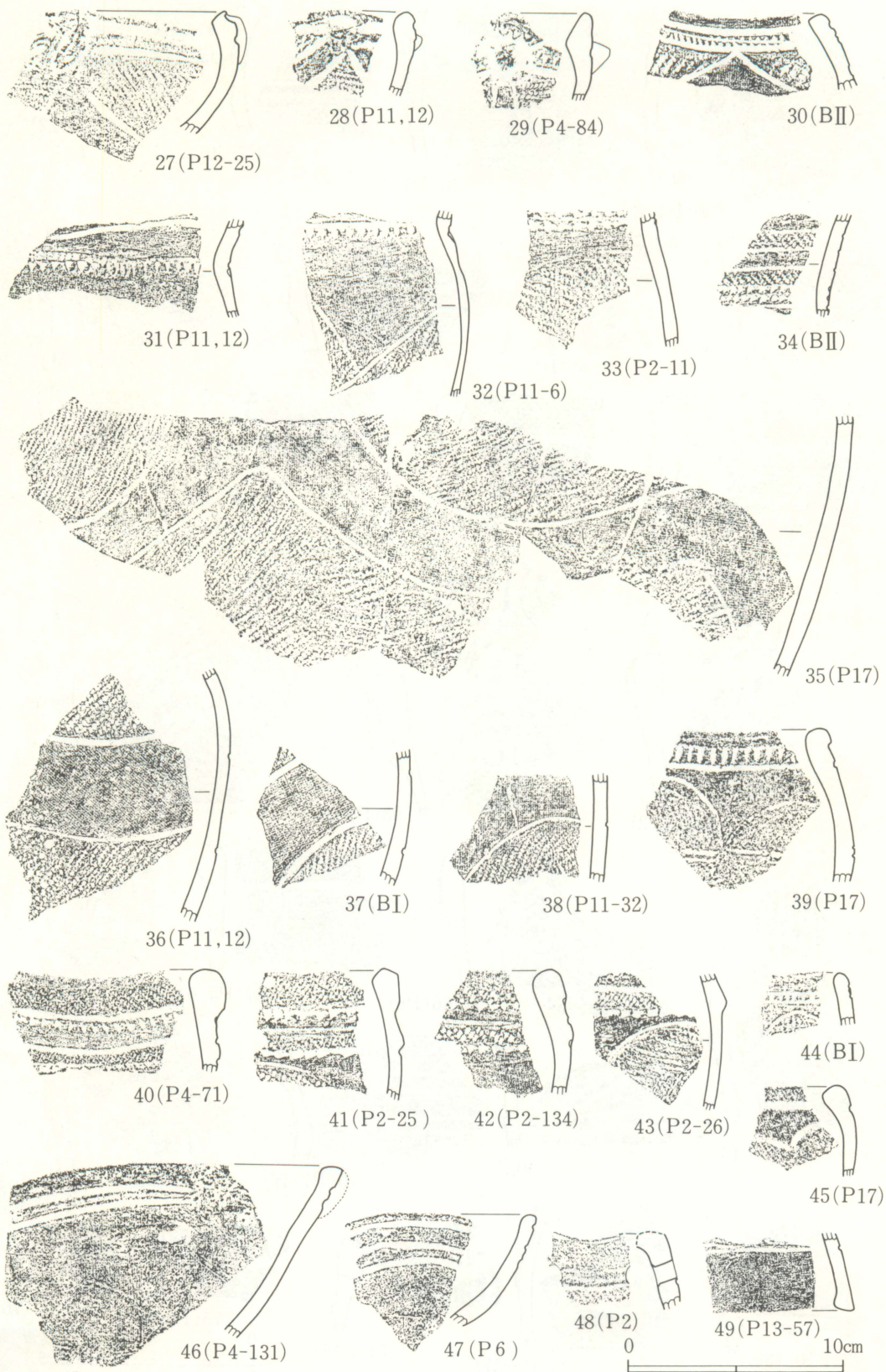
以上は安行Ⅰ式と考えられ、40～43の三角形の刻み目文をもちコンパス文風の磨消縄文を施こす土器は曾谷式土器の影響が残っているといえる。

64・67・70・72・77～81は、刻み目のある細隆帯をもつ一群である。

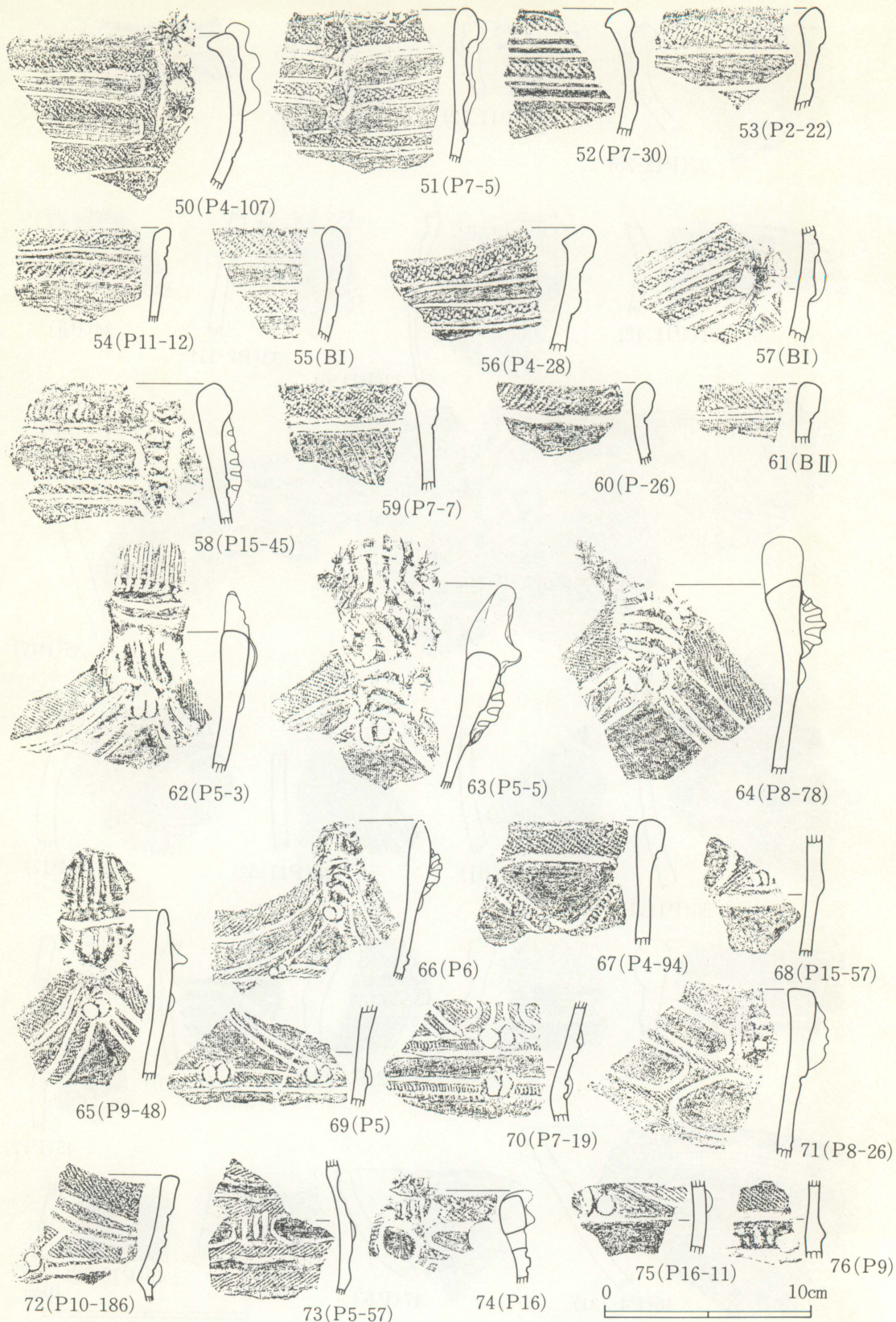
64・67・70・72は、三角形の区画帯をもち、細隆帯の連結部に豚鼻状の貼瘤を付している。67は平縁、他は波状口縁をなし、波頂部には1対の角状突起を付したり、縦長瘤を貼付するもの（64）がある。また、70・72は三角枠内に縄文を充填し、沈線で曲線文を描いている。77～79は口縁部が短かく反り、口唇部に刻み目を施こし、口縁直下に刻み目のある細隆帯を横走させる。細隆帯には豚鼻状貼瘤を付し沈線を垂下している。台付鉢形土器であろう。80・81は非常



第 14 图 土器拓影图 (1/3)



第15图 土器拓影图 (1/3)



第 16 图 土器拓影图 (1/3)

に細かい刻み目をもつ細隆帯を、円形・三角形等に連結し合っている。焼きの良い小形品である。80には貼瘤も認められる。

以上の土器は、安行Ⅱ式である。

Ⅲ群土器（第16図58・62・63・65・66・68・71・73～76、第17図82～第18図、131）

（図版9～11）

62～76（Ⅱ群土器は除く）は帯縄文をもつ土器で、安行Ⅱ式の影響を強く残した土器である。内部の三角枠を形成する細隆帯には縄文を施こし、連結部に豚鼻状貼瘤を付すのが特徴である。62は扇状把手を波頂部にもち、その外面は横、内面は縦の沈線を施こす。更に把手下部には縦沈線を施こす横長瘤が付す。63は横長瘤、縦長瘤の両者を付している。65は下膨れの豚鼻状貼瘤を付し、把手内面に縦沈線が入る。68・69・75・76は胴部破片である。73は薄手で焼成良好な胴部破片で、貼付文はあまり高まりをもたず、匠意的な沈線を施こしている。71は波状口縁の波底部で、刻み目のある縦長瘤を付す。縄文施文の細隆帯は、縦長瘤下部に隅丸三角形、波頂部に向かっては長楕円形を描いている。刻みのある縦長瘤と縄文施文の細隆帯をもつ58は、口縁部に紐線文を施こしている。一応、この群に含めた。74は胴部に張りある土器である。

以上の土器は、安行Ⅲa式に含まれる土器で、当貝塚既出の資料にはあまりなかった土器である。安行Ⅲaという入組文をもつ東北地方の影響下に成立する土器群が目立っていたが、安行Ⅱ式の伝統を継承した土器も当貝塚には多く存在していることが判明した。

82～89は入組文をもつグループで、安行Ⅲaに対比できよう。

82・83は玉抱き三又文、84・86は入組文、85・88は入組文のくずれたものか。87は彫刻的な三角形の刻みで三又文の可能性が高い。89は頸部に凸凹のある隆帯をめぐらし、口縁部には沈線上部に縄文を施こしている。

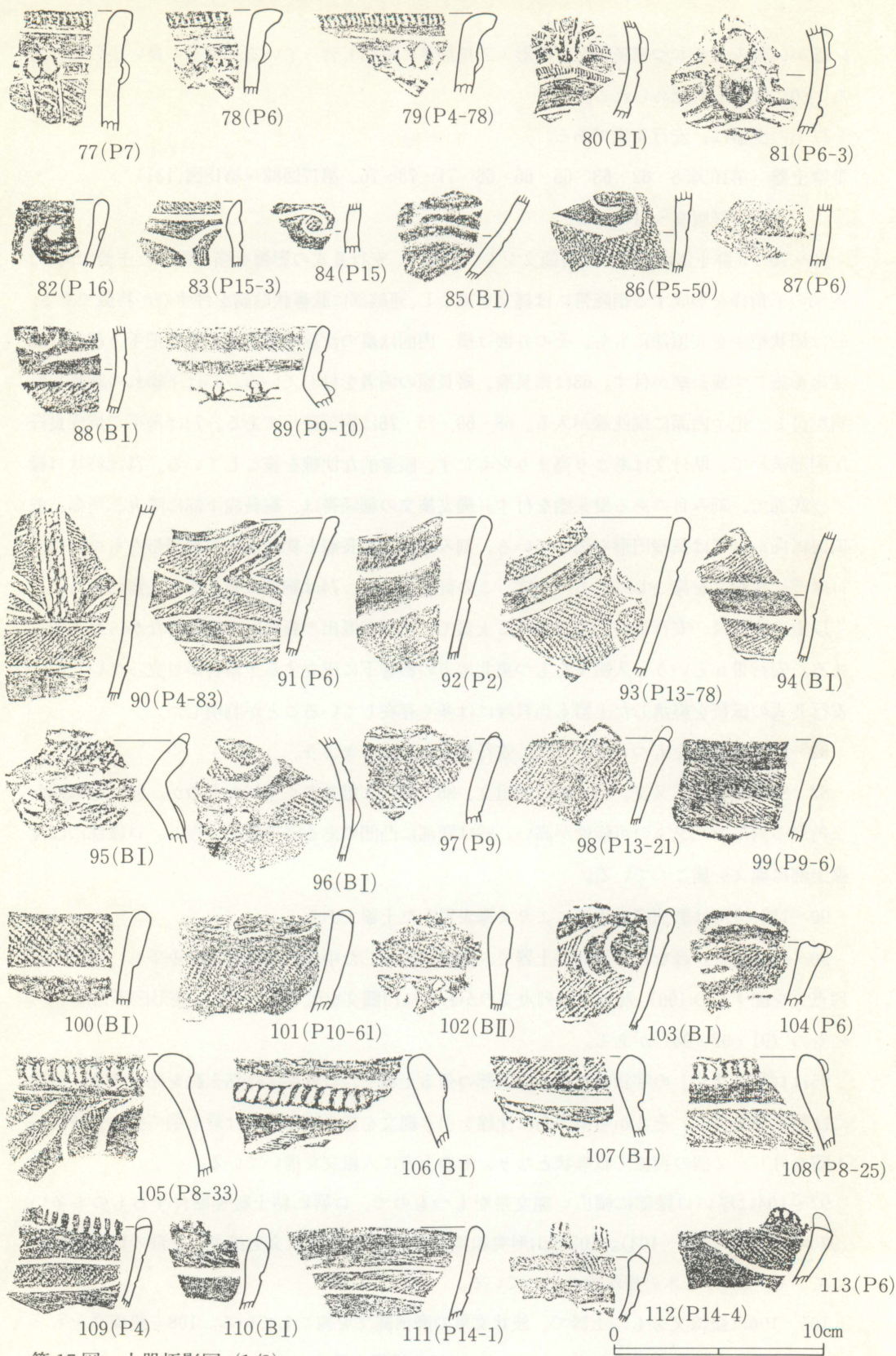
90～113・129は磨消縄文手法により文様表現した土器である。

90～94は波状口縁をなす深鉢形土器で、菱形に区画した中央に平行沈線を垂下し、その中に列点文を配すもの（90）、沈線区画列点文のかわりに円圏文を配すもの（93）、菱形区画だけ（？）のもの（91・92・94）がある。

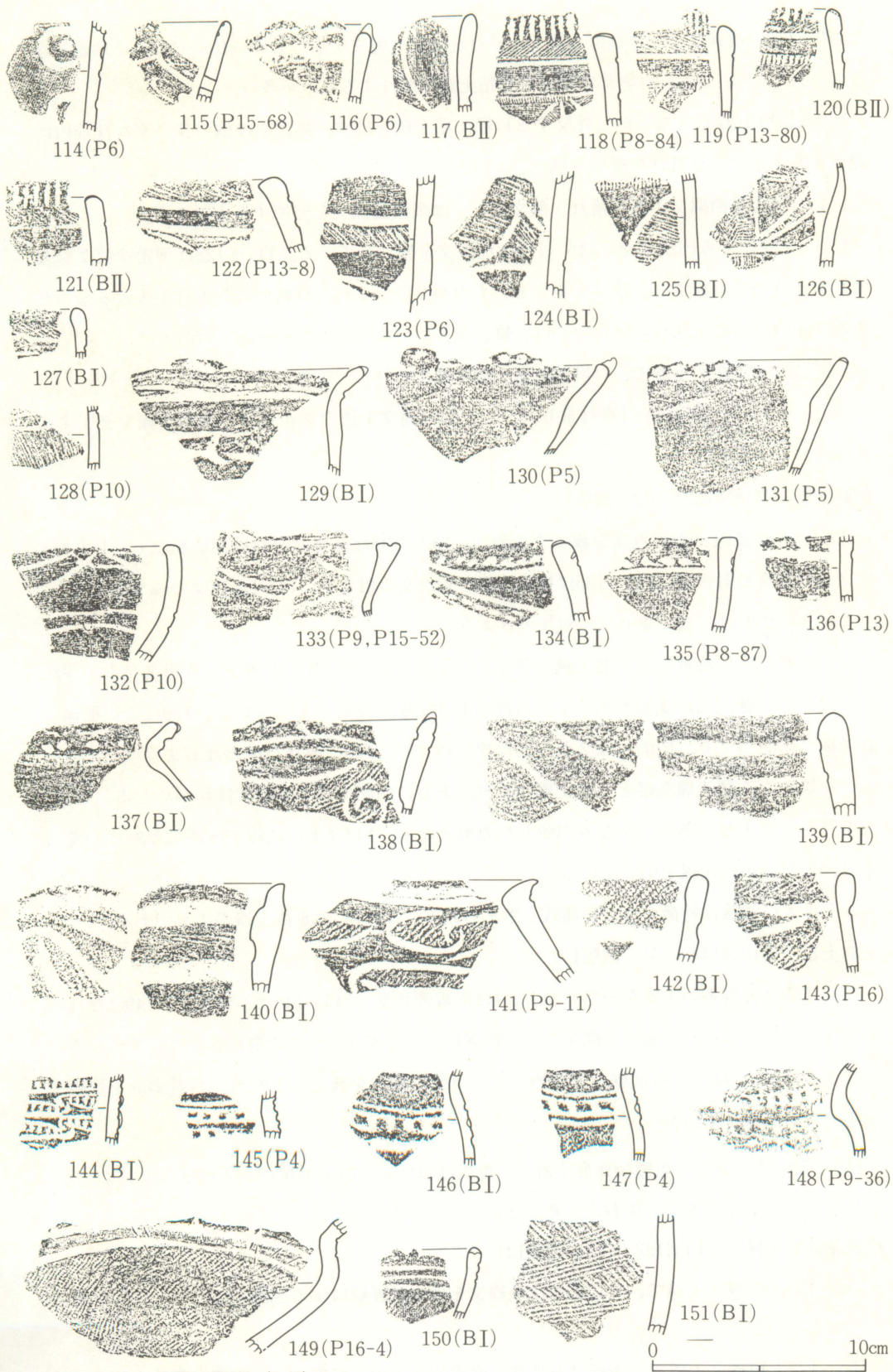
95は口縁が「く」の字状に外反し、胴部の張る土器で、口唇部には粘土紐を貼付する。肩部には粘土瘤を付し、そこから斜方向に沈線を引き縄文を施文する。96は最も胴の張る部分に粘土瘤を付し、2個の押捺で豚鼻状となり、その上方に入組文を描いている。

97～104は厚い口縁部に幅広い縄文帯をもつもので、口唇に粘土紐を貼付するものも多い（97・98・101・103・104）。102は山形突起状をなす。103は波状文を描き、上部の縄文は磨消している。104は2本の短沈線を引いている。

105・106は紐線文をもつ土器で、波状文風の磨消縄文を施こしている。108も紐線文をもっており、平行沈線内に縄文を施こしている。107は帯縄文風である。



第 17 图 土器拓影图 (1/3)



第18图 土器拓影图 (1/3)

109～113は浅鉢ないしは碗形土器で、平行沈線間に縄文をもつもの（109～112）と曲線的なもの（113）とがある。口唇部に刻み目や粘土瘤を貼付するものが多い。

129は鉢形土器であろうか。外反する口縁に粘土紐を付す。体部には幅の狭い平行沈線内に縄文を施こし、三日月状の孤線を描く。

114～128は磨消縄文手法が薄れ、無文もしくは細密沈線文を充填する土器である。

114は沈線による円圏文を、115・116は沈線文を施こしている。117～128は細密沈線文を充填した土器で、直線文と孤線文と組合せたものが多い。また、口唇部に刻み目を入れるものもある。区画内の細密沈線に変化をつけ、縦、横、斜めに引くものもある（120）。

130・131は浅鉢形土器で、口唇部に粘土紐を波状に付している。

以上、90～131は姥山式（安行Ⅲb式）で、磨消縄文手法のグループと細密沈線を充填するグループとがある。

Ⅳ群土器（第18図132～142、図版11）

132～137は孤線文や列点文を施こす土器で、132・133は孤線文を口縁部に施文し、134は孤線文と列点文の組合せ、135・136は横走沈線と列点文の組合せ、137は孤線文のみである。

これらの土器は、安行Ⅲc式に対比できよう。

138～142は太い沈線による磨消縄文帯をもつ土器で、138は縄文を地文に入組文をもつ深鉢形土器で、口縁内面に沈線をめぐる。口縁内面は肥厚し段をつくっている。139は太い孤線で磨消縄文帯をつくり、内面には2条の太沈線がめぐる。140は波状口縁となるようで、やはり太い沈線による磨消縄文帯と入組文風の彫刻がある。内面には2条の太沈線がめぐる。141は入組文をもつ土器である。かなり内傾した器形となる。142は太い沈線で区画した幅広い縄文帯に、太く短かい沈線を引いている。

以上は太い沈線に特徴をもつ前浦式と考えられる。なお143はⅢ群土器のようである。

Ⅴ群土器（第18図144～151、図版11）

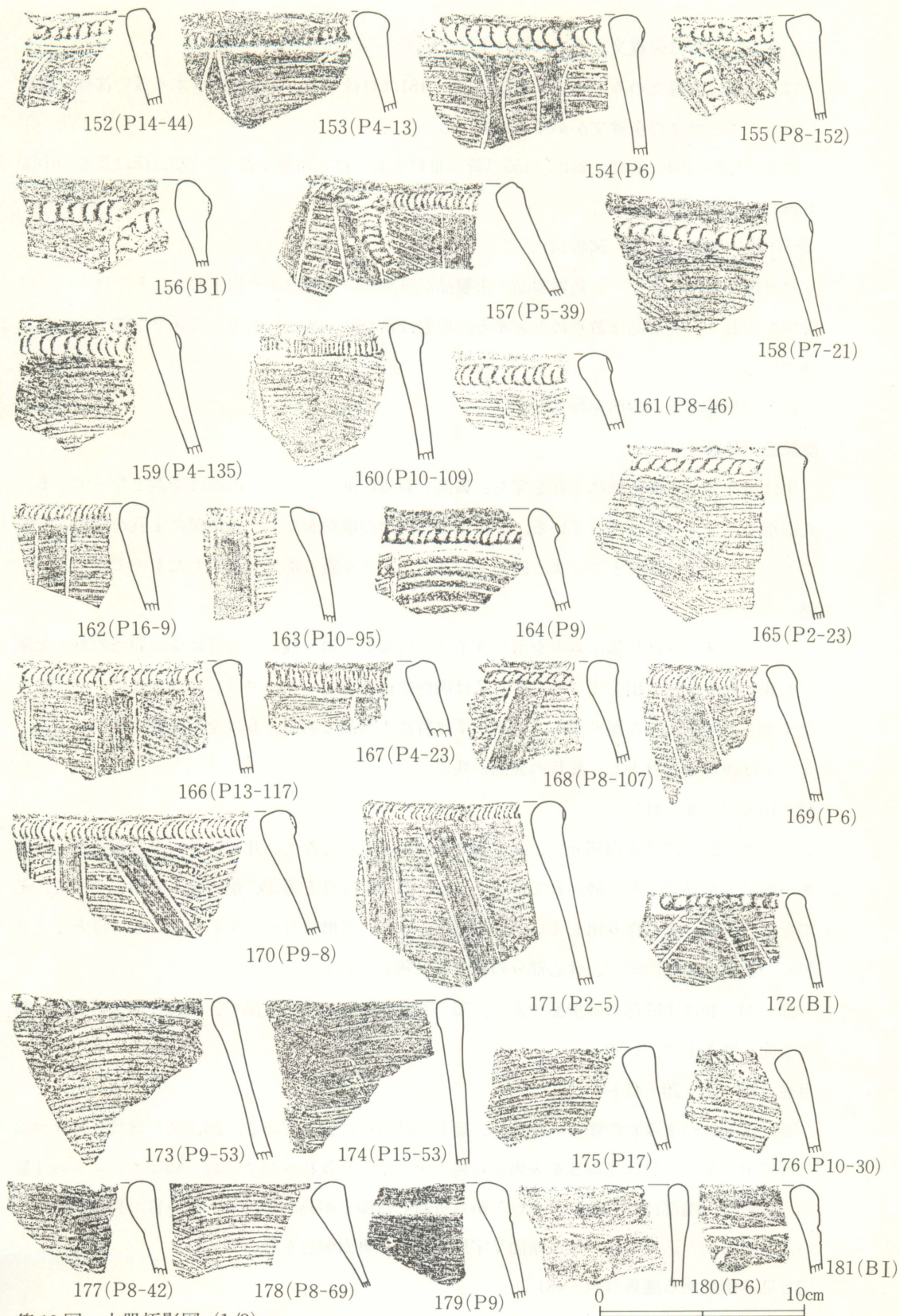
144～150は大洞系の土器を一括した。144は孤線連結文、145～148は羊歯状文、149は浅鉢もしくは台付鉢と思われ、緻密な縄文とくびれ部以上の沈線文からこの群に含めた。焼成は良好である。150は口縁に平行沈線を3条めぐり、下部に縄文を施こしている。口唇頂部を沈線で凹ませ、更に瘤状突起をつけている。

151は条痕文を施こす粗製深鉢形土器で、焼成は良いが、胎土が粗いためザラっとしている。1点のみの出土であるが、荒海式と考えて良いであろう。

粗製深鉢形土器（第19図152～181、図版12）

152～154は紐線文土器で、口辺部には条線文を地文に孤線による区画がなされ、内部を磨消している。

155～172も紐線文土器で、条線文を地文に直線的な区画文を施こし、内部を磨消するものが



第19图 土器拓影图 (1/3)

多い。155～157は紐線文を下方に垂れ下げた例である。

173～178は条線文のみの施文である。179～181は口縁下1・2cmの所に太く浅い沈線を横走したもので、地文の条線文がかすかに見える。

以上、152～154はⅡ群土器に、155以降はⅢ群土器に伴う粗製土器で、173以降はⅢ群の中でも新しい部類に入る。

骨角器 (第20・21図、図版14)

当貝塚からは、多くの骨角器製品・未製品が貝層及び土壌内より出土した。そのほとんどは破損しており、完形品は数点にとどまる。形態は、銛が多く、漁労との係りを強くうかがわせている。

以下、形態ごとに説明を加えたい。

垂飾品 (牙鏃) (1～3)

1は歯クジラの歯基部に1孔を穿ち、裏面を斜めに削っている。内部は空洞となっている。先端部のエナメル質は残っている。2・3は三角形の鏃形をなし、基部側に1孔を穿つ。ともにイノシシの牙を素材とし、よく磨いている。エナメル質の部分を利用したものである。

銛 (4～9)

4・5・8・9は片側に返りをもつタイプで、幅広く消り残した部分に深い斜めの刻みを施こし鋭い返りを作り出している。6・7は両側に返りをもつタイプで、6は交互に、7は対をなすように鈍い返りを削り出している。7は特に大形品である。6は全面を磨き光沢がある。4・7は鹿角を素材とし、瘤状の表面が残る。

銛 (10～27・30～41)

10～22・24～27は先端部分で、鋭く尖るものはほとんどなく、比較的鈍い形状を示す。15は鹿角製の大型品で丁寧に磨かれている。他は、直線的な骨を選定、縦方向に分割して側辺、先端を磨いて長い銛を作り出している。先端部分はすべて磨きながら尖らせている。ほとんどの製品の断面は逆U字形で、骨心部分の弯曲部を残している。

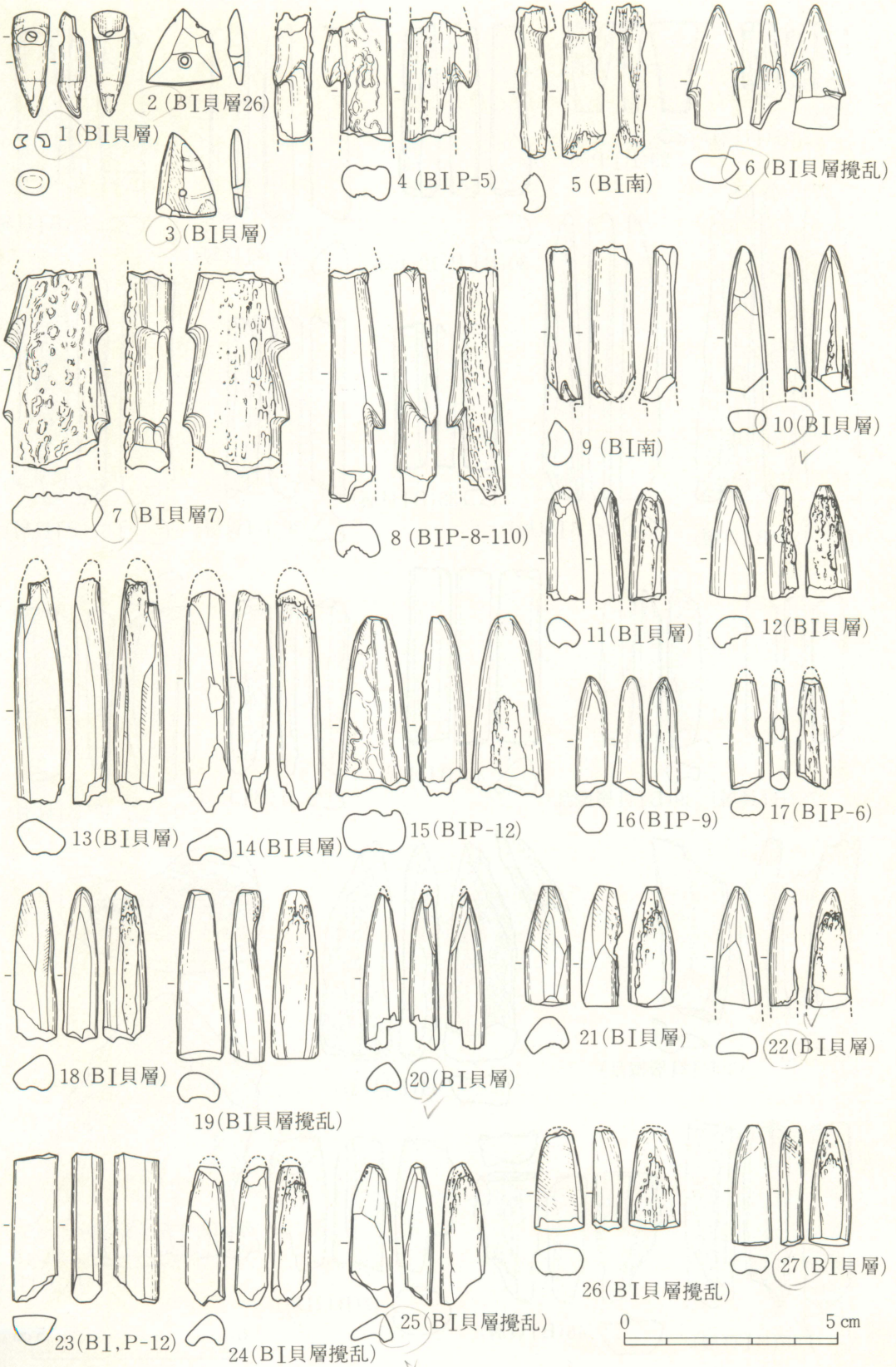
23・30～40は中間部の破損品である。33・37は鹿角製の未完成品で、側辺の磨きが甘い。38は全面を磨き上げている。

用途不明 (28・29・41～43)

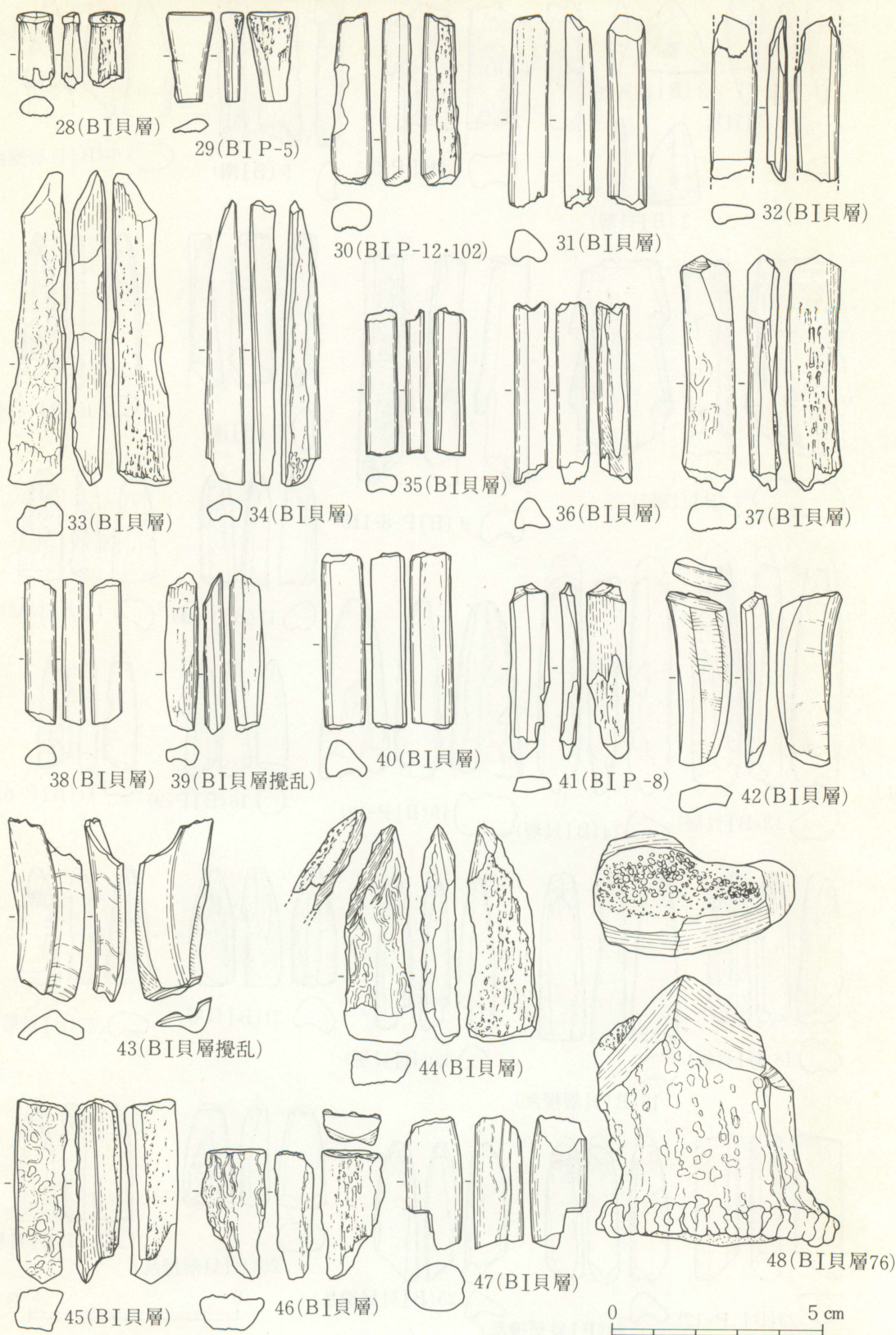
28は先端につまみ状の膨らみがあり、紐をかけるのに適している。29は長台形状に磨き両端とも平坦である。41は先端部を表裏から鈍くそぎ落とし籠状をなす。42・43はイノシシの牙製で、前者は先端部に切り込みを入れてから折断した様子がわかる。エナメル質の裏側を磨いている。43も切り込みの跡が残り断面V字形を示す。裏面側辺を磨いている。

切り込み痕のある鹿角 (44～48)

44は先端部を斜め方向に切り込み、その際にも鋭い切りキズが残る。45は側辺を丁寧に2段



第20图 骨角器实测图 (2/3)



第 21 图 骨角器実測图 (2/3)

階に分け切り込む。46は先端部に表裏から切り込みを入れ、折っている。48は鹿角基部で、周囲4～5ヶ所から斜め方向の切り込みを入れ、折り取っている。47は鹿角の先端部で光沢が良い。

貝製品 (第22図、図版15)

当貝塚からはおびただしい量の貝輪が採集されていることは周知のとおりであるが、今回も十数点検出している。また、貝刃も多い。

貝輪 (1～13)

完形品は2点(1・13)と少なく、ほとんどが破損品である。13のツメタガイ製以外はペンケイガイ製である。

1は外縁部を残し中央部を大きく穿孔した完形品。穿孔部割れ口はさほど磨かれず角張っている。2は殻頂部分が破損しており、失敗品と考えて良いようである。3は風化が進行し、粉をふきもろい。殻頂付近は欠損している。4は腹縁部分の破片、5・6も同様で、6は穿孔部割れ口を磨いた痕跡が観察できる。周辺部の破損が激しい。失敗品かもしれない。8～12は殻頂部分のみを残した破損品で前者に比べ小形品が多い。13は巻貝のツメタガイを素材に内部から外方に向かって、小穿孔したものである。

貝刃 (14～21)

14～20はチョウセンハマグリ、21はコタマガイ製で、腹縁部に小剥離を加えたものである。剥離の際、殻表皮部分の破損が目立ち、17・18・19は特に著しい。小剥離痕は石器のそれによく似ている。

石器 (第23・24図、図版16)

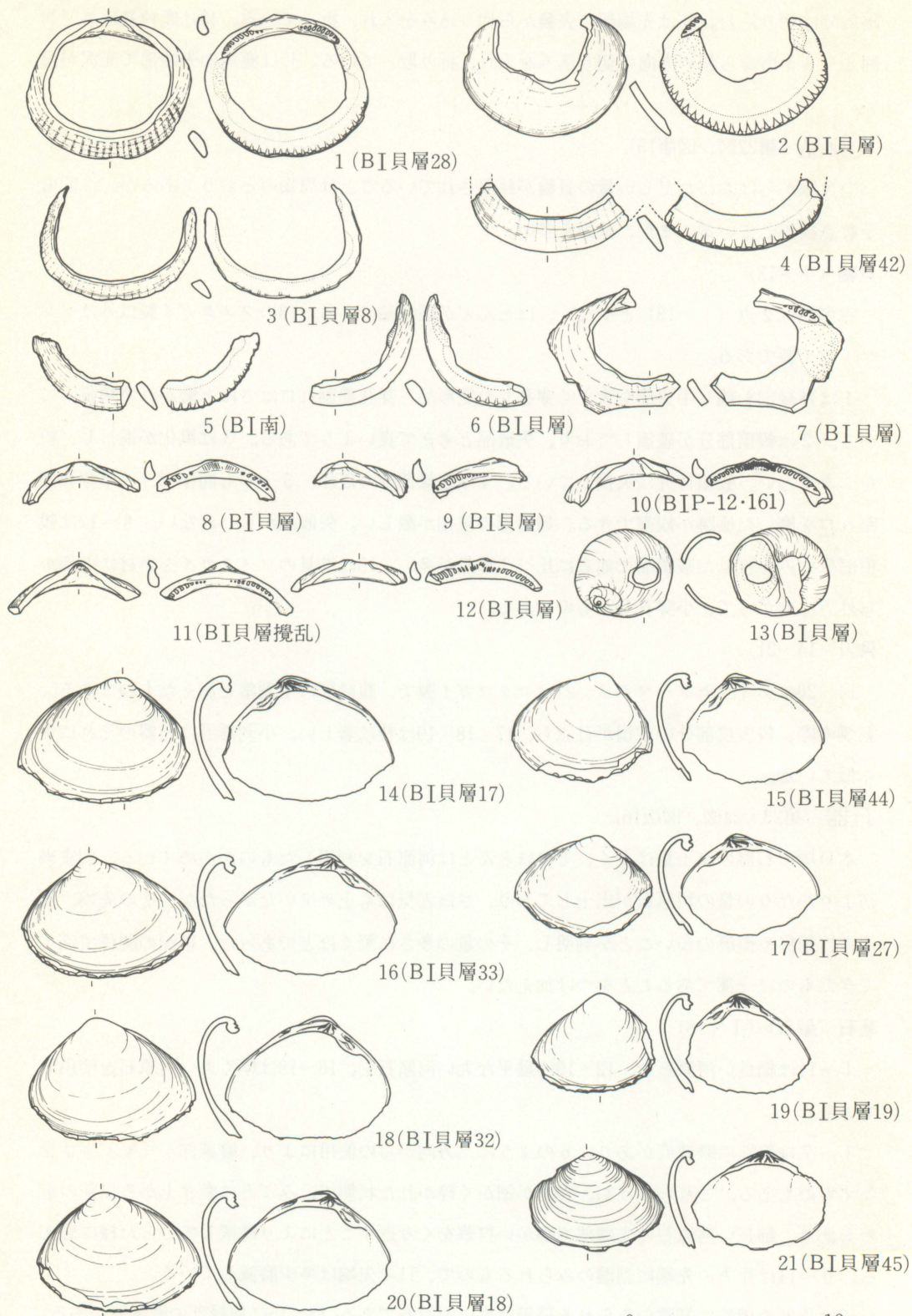
本貝塚の石器の出土量は多く、そのほとんどは河原石を利用したものが占めている。調査当初よりかなりの量の河原石が出土しており、さほど気にも止めていなかったが、その先端、側面に打撃痕や擦痕の多いことが判明し、その量の多さに驚くほどであった。紙面の関係で図示できたものは一部であることをつけ加えたい。

磨石 (敲石) (1～18)

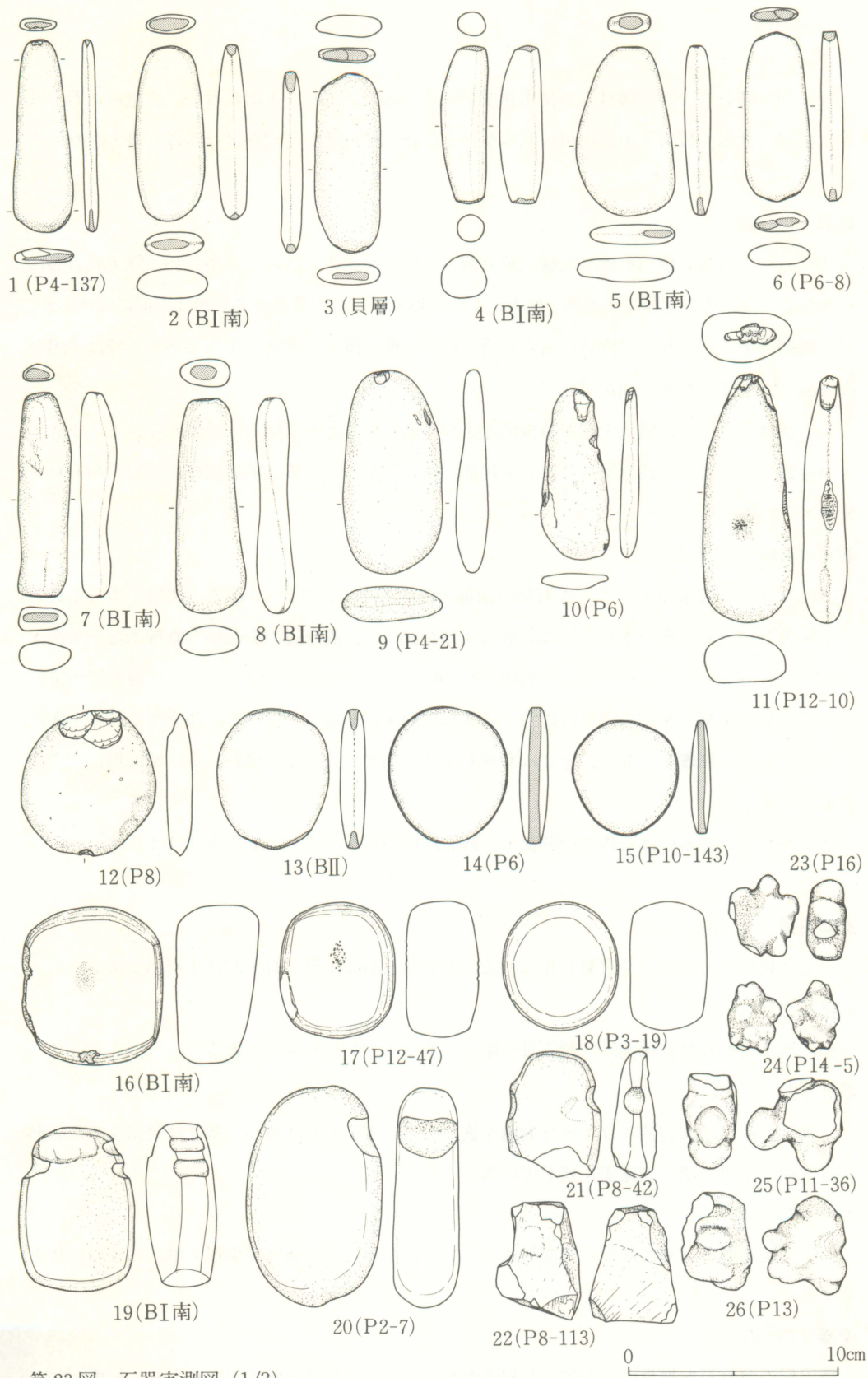
1～11は細長い河原石を、12～15は扁平な丸い河原石を、16～18は厚く丸い河原石を使用している。

1～7は両端に磨滅痕があり、6のように二方向からの使用により、磨滅部が「V」字状をなすものもある。これらのうち、表面が細かく砕かれた状態で、みごとに磨き上がる以前のものもあり、細長い河原石の先端部で細かい打撃をくり返すことにより磨滅していった様に思える。9～11は片方の先端に剥離のみられるもので、11の先端は多少磨滅している。

12は片面の両端に剥離のみられる扁平な丸い河原石である。13～15は周縁部に磨滅痕がある。13は対角方向にあり、片側は二方向からの使用で、「V」字形を示す。14・15は全周に認めら



第 22 図 貝製品実測図 (1/3)



第 23 图 石器实测图 (1/3)

れる。

16～18は磨石で、16は側縁部の使用頻度が高く、丸味がとれて方形に近い。平坦部に若干凹みが観察できる。17も平坦部中央に凹みがある。18は平坦部が光沢をはなつほど磨き上がっている。

砥石 (19～26)

19～21は砂岩質の楕円形礫の側縁に擦り減った部分が認められるもので、19は隅丸長方形に形を整え、長い辺の片側に1か所、他方に2か所擦り減った部分がある。20は片側に認められ、21は両側にある。これらは棒状のものを研いた時に擦り減った痕跡のようである。22は平坦な擦り減り方をするため、面ができています。

23～26は突き出した瘤状突起が特徴的な小形の砥石で、通称玉砥石と呼ばれている。小さいものを研ぐうちにその部分がえぐれ、突起部が残ったものである。前者同様、砂岩質の石材を使用している。

石剣 (石棒) (27～29)

27は沈線による彫刻がみごとな石剣の頭部欠損品である。全長9.1cmで、沈刻によって長方形の区画をつくり、その中をさらに方形に沈刻を施し、両短辺中央部から直線的な三叉文が「T」字形に向かい合う。三叉文の間隔は2cm程あり、その空間を埋めるように両長辺中央部から三角形の彫刻文を刻み、それに沿ってさらに細沈線を施している。残念なことに片面は石の目に沿って剥離しており、そこにも同じ文様が刻まれていると思われる。断面形はやや楕円形を示す。

28・29も石剣あるいは石棒の中間部で、断面は楕円形を示す。ともに表面はよく磨かれている。

磨製石斧 (30～33)

ともに鈍角な刃部をもつ磨製石斧で、32は大形品、30は中形、31・33は小形品である。

石垂 (34)

楕円形に磨かれた長軸両端に刻み目を彫ったもので、かなり扁平である。

石匙 (35)

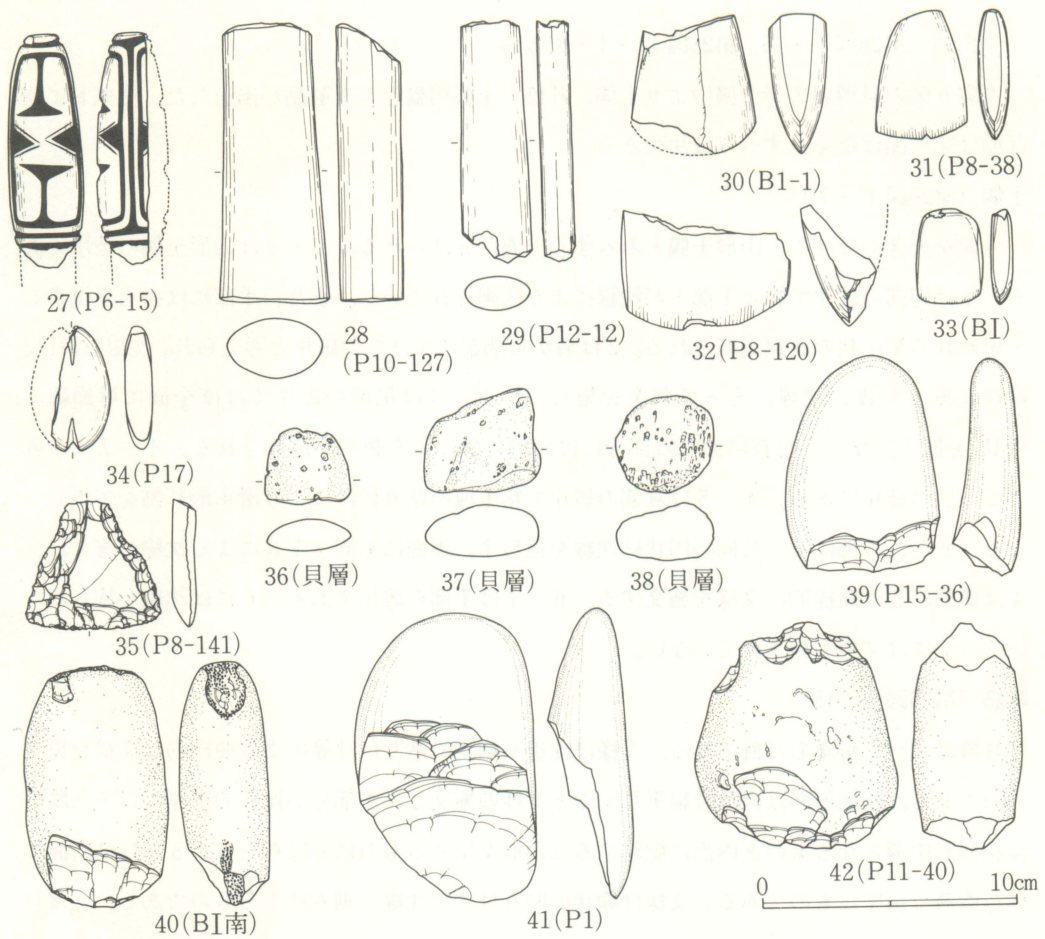
三角形を呈し、側辺部には丁寧な剥離を施しているが刃部は鈍い。基部は欠損するため形状は不明。中央に第一剥離面を残している。

浮子 (36～38)

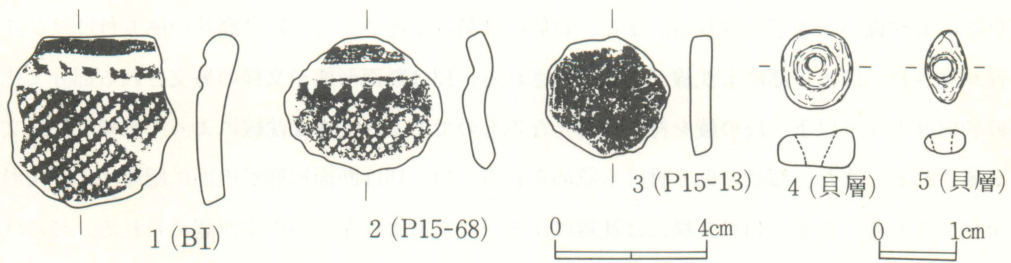
ともに軽石製で、36は磨かれ断面形状がレンズになる。37・38は多少形を整えた程度の仕上がりである。

礫器 (39～42)

楕円形の河原石を簡単に打ち欠いた程度のもので、39・41は片側に刃部をもち、片面だけの



第24図 石器実測図 (1/3)



第25図 土製円盤実測図 (1/2)、玉類実測図(1/1)

かなり大雑把な剥離である。40・41は両端に刃部（剥離痕）をもち、40は磨滅部分が見られる。42は強烈な打撃により両面同時に剥離し、楔状をなしている。

玉類 (第25図4・5、図版13)

2点出土した。ともに長さは1 cm弱の楕円形で、中央に5 mm程の穴があく。丁寧に磨き光沢がある。

土製品 (第26図1～15、第25図1～3・図版13)

本調査区の貝層および土壌中より土偶、耳飾、土製円盤等の土製品が出土した。土偶および耳飾は完形品はなく、すべて破片である。

土偶 (第26図1～7)

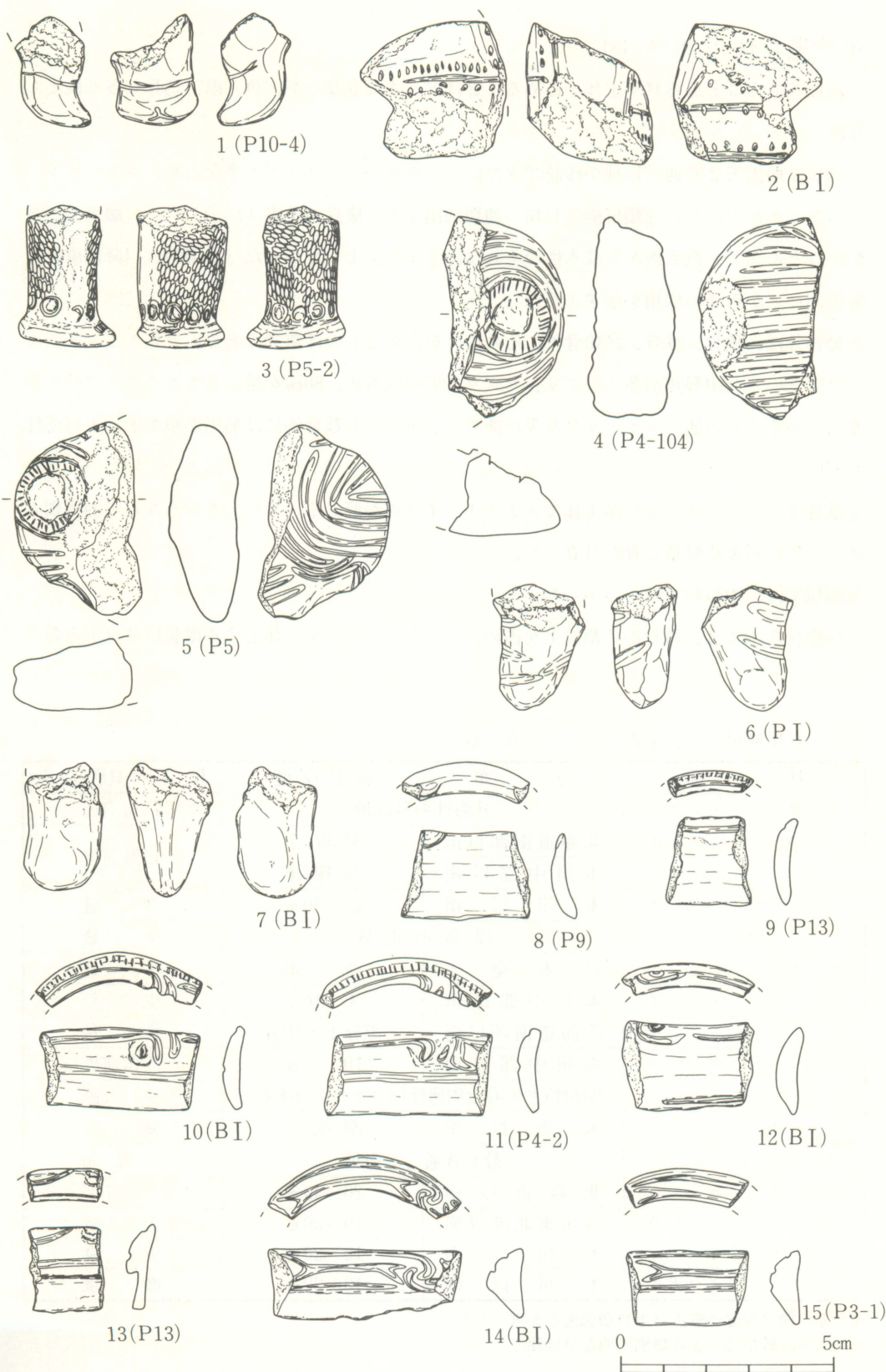
土偶を大きく分けると山形土偶とみみずく土偶に分けられる。1～3は山形土偶の破片である。1は腕部の破片で腕と手部とが沈線により区画されている。また、手部には指を表現すると思われるY字状の沈線が施される。2は肩から胴部にかけての破片と考えられ、沈線を横位、縦位に施した後、沈線にそって刺突を施している。3は足部の破片ではほぼ全面に単節縄文(LR)を施す。また、足首にあたる部分には円形竹管による刺突が巡らされる。4～7はみみずく土偶の破片である。4・5は耳部の破片で粘土塊の貼り付けにより滑車形耳飾を表現している。また、耳飾にそって同心円状に沈線を巡らす。裏面にも同一工具による沈線が施され、4は横位に5は曲線的に文様を施文する。6・7は手部の破片である。6には沈線が施されている。7には文様が施されていない。

耳飾 (第26図8～15)

耳飾はすべて滑車形耳飾である。文様は沈線や瘤状の貼り付け等により曲線的な文様を施すものである。断面形態は肉薄で扁平なものと文様の施文される部分が比較的肉厚で以下一段の稜を持ち肉薄となるものと内面に肥厚する三角形を呈するものに分けられる。8～12は断面形態が肉薄で扁平なものである。文様は瘤状の貼り付けや沈線、刻みによるものである。8は口唇に瘤状の貼り付けとそれにそって沈線が施される。9は口唇直下に一条の沈線が施される。また、口唇には刻みが施される。10・11は瘤状の貼り付けと曲線的な沈線が施される。内面中央部にも沈線が一条巡らされる。また、口唇には刻みが施される。12は瘤状の貼り付け及び沈線が施され、図上下部にも沈線が一条巡らされる。13は断面形態が文様の施文される部分で比較的肉厚となり以下一段の稜を持ち肉薄となるものである。文様は沈線によって直線文曲線文が施される。また、瘤状の貼り付けも認められる。14・15は断面形態が内面に肥厚する三角形を呈するものである。14の文様には沈線による三叉文および左二つ巴文が認められる。15には三叉文が認められる。二叉文の上部の沈線は巴文を構成する沈線の一部分と思われる。

土製円盤 (第25図1～3)

土製円盤は土器片を利用したものである。1は口縁部破片の周囲を円形に整形し周囲を若干磨いている。口縁部直下の沈線文や単節縄文(LR)を施していることから加曾利B式期の所産と考えられる。最大長4.4cm、重量22.3gを測る。2は土器の胴部破片を円形に整形する。胴部頸れ部に三角刺突文を施し以下単節縄文(LR)を施していることから加曾利B式期の所産と考えられる。最大長4.1cm、重量11.0gを測る。3は胴部破片の周囲を円形に整形し周囲を若干磨いている。文様がないため時期の断定はできない。最大長3.2cm、重量6.8gを測る。



第 26 图 土製品実測図 (2/3)

動物遺存体 (図版17・18)

貝塚であることから貝が主体を占めることは言うまでもないが、魚、獣、鳥骨も多く検出した。

貝類は前出表2の通り15種が確認できた。チョウセンハマグリが大半を占め、コタマガイ、ワスレガイが次いだ。分類可能な貝類の種類別出土率、棲息地を表3に示したが、鹹水性の貝類がほとんどで、汽水性から淡水性のそれはほとんど出土しなかった(古墳時代以降は溝状遺構の例などから逆の様相を示すようだ)。

動物骨は、魚骨、獣骨、鳥類骨で、その主体を占めるものは魚骨である。クロダイ・スズキ・フグといった中形魚が多く、ブリ、マグロなどの回遊魚、80cmを越えるであろうマダイも含まれている。その他、エイ・サワラ等があり、小魚の骨も数量的には前出の魚を上回る可能性が高い。

獣骨は、シカ・イノシシが主体で、イタチ・イヌ科が混じる。また、クジラなどの海獣類も多く、気孔が多く軽量の骨が目立った。

鳥類では、中形のものが多かった。

動物骨の中では、魚骨が7割以上を占め、シカ・イノシシを主体とする獣骨はさほどの量ではない。

表3 貝類種類別出土率表 (サンプルA・Bから)

種 類	分 布	棲 息 深 度	BIトレンチ貝層出土率
チョウセンハマグリ	外海性の砂泥地		75%前後
コタマガイ	北海道南部以南	潮線下	15%前後
ワスレガイ	本州中部以南	潮線下	
ベンケイガイ	本州以南	20~40m	微量
オキシジミ	浅海の泥底		少量
ヤマトシジミ	日本全土	淡水	少量
アカガイ	本州中部以南	4~10m	少量
イガイ	北海道南部以南	潮線下~10m	微量
ダンベイキサゴ	本州中部以南	10m	5%前後
キサゴ	外洋性(キサゴ)と内湾性(イボキサゴ)がある。		少量
ミルクイ	本州以南	潮線下	微量
ツメタガイ	最も普通な浅海種		1%弱
アカニシ	北海道以南	20~40m	2~3%
トカシオリイレボラ	本州東北部以南	10~20m	少量
バイガイ	本州以南	10~20m	少量
コゲチャタケノコガイ	本州以南	10~20m	微量

※分布、棲息深度は原色日本貝類図鑑を参考にした
出土率は破損等による識別不明な貝は除く

V まとめ

1. 余山貝塚の現状と分布

余山貝塚は、低位段丘面外縁部の砂丘（砂堆）上に位置し、貝層は標高5～7mの高田川右岸数地点に分布する（付図参照）。主要貝層は長軸140m、短軸最大幅70m、最小幅37mの規模をもち、JR成田線南側から余山町内を通る旧国道356号線まで広がる。小地点貝層は旧356号線北側に30m×10mの第1ブロック、三島神社境内に径15mの第2ブロック、主要貝層南西に径10mの第3ブロック、主要貝層と第2ブロックとの間に道路・宅地盛土のため不鮮明ながら第4ブロックがある。さらに主要貝層から120m程離れたJR成田線南側に55m×15mの細長いシジミ貝層がある。

それぞれの貝層の保存状況は、次のとおりである。

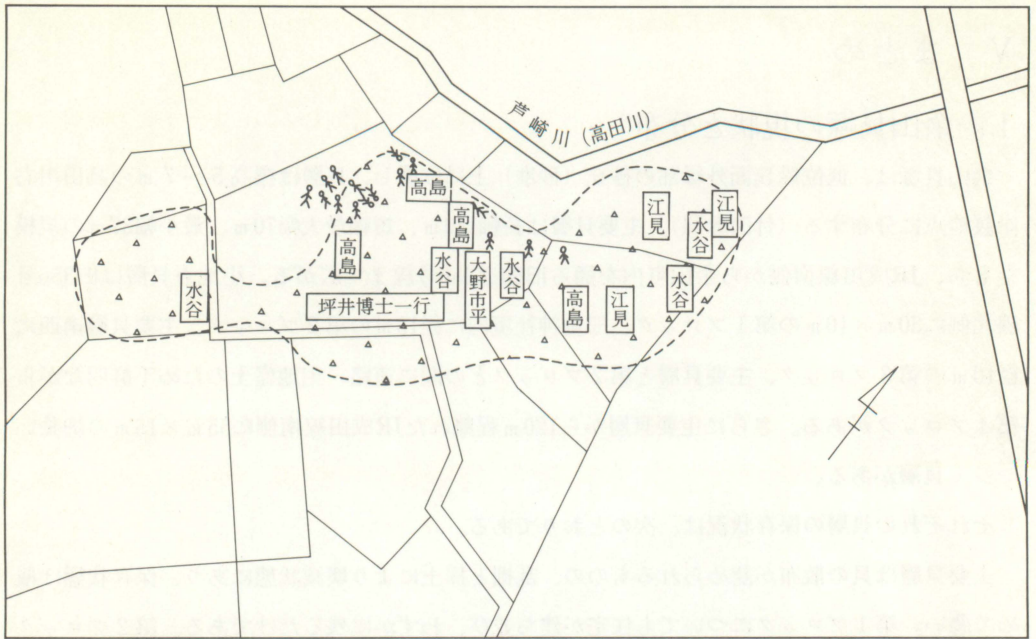
主要貝層は貝の散布が認められるものの、乱掘と採土により壊滅状態にあり、保存状態は極めて悪い。第1ブロックについても住宅が建ち並び、わずかに残るだけである。第2ブロックは墓地及び一部コンクリート敷の境内があり不良、第3ブロックは畑地内で保存状態は良好と思える。第4ブロックは実態不明である。シジミ貝層は畑地内で良好である。

各貝層の時期については、主要貝層は南側が今回の確認調査の結果から縄文後期中葉を主体とし、中央部は後期中葉から晩期前半、北側が後期末から晩期前半を中心とした貝層であったと推測される。小ブロックは、チョウセンハマグリを主体としていることから縄文期の貝層であるが、細かいところは不明である。シジミ貝層は、小見川町から銚子市にかけて砂丘上に点在する奈良、平安時代以降の貝層とよく似ている。

余山貝塚は貝層だけでなく、周囲の低地にも縄文晩期を中心とした遺構、包含層の広がりを見せることがB地点の調査等で明らかとなった。また、縄文土器の散布範囲は広く、高田川対岸の砂丘からDトレンチ付近までである。しかし、密度的には貝層分布範囲に集中する。なお、縄文時代以降の遺物も多く、主要貝層からCトレンチ付近に古墳時代～歴史時代の遺物が増し、東に向かうにつれ時代が新しくなるようである。

2. 貝塚発掘の経過

余山貝塚が最初に文献に登場するのは、明治30年、東京帝国大学の『日本石器時代人民遺物発見地名表』である。その後、坪井正五郎・吉野長太郎・大野雲外（市平）・江見水蔭らが発掘をくり返し、多量の遺物を掘り出し、一躍有名になった。当時は銘々が思いおもいの場所で貝層を掘り起こしており（第27図）、まさに乱掘状態に陥っている。この第27図は、貝層の分布、人骨の出土位置など判明する数少ない貴重な資料である。しかも、乱掘が主要貝層のほとんどに及んでいることも語っている。その後、大正から昭和にかけ、発掘調査が実施されているが、明治期の乱掘が激しく、十分な成果は得ていない。昭和28年には、佐野・野口両氏によ



第 27 図 明治期の発掘、人骨出土地点図 (高島唯峰貝塚叢話より一部改編)

る調査が行なわれ、多量の出土品を得ている。場所によっては遺存の良い地点も存在していたようである。しかし、決定的な打撃を受けたのが、先述のとおり昭和34年の道路改修工事に伴う採土であり、この時、急拠工事をストップし、搬出前の貝層部を調査している。Aトレンチからその地域が壊滅していることを実証した。このような状況の中で、B I トレンチに若干手つかずの貝層が存在していたことは幸運であったといえるし、他の地点も掘り残した部分が存在することを予感させる。なお、貝層以外の地域には保存状態の良い包含層があり、余山貝塚の性格を究明する上でも重要で、周辺部の開発と今後の保護の対応が急がれるところである。

3. 余山貝塚の特徴

今回の確認調査で、余山貝塚の貝層の構成が部分的に解明できた。各層の種類別出土率はそれほど変化がなく、また、土器も層位ごとに分離できるような資料は得られなかった。おおむね加曾利B2・3式が主体をなす時期の貝層ととらえて良いであろう。特徴は鹹水性の貝が主体で、汽水性、淡水性の貝の出土がほとんどないことである。

利根川下流域の貝塚例としては、支谷深部の成田市荒海貝塚^{②5}が次のような状況を示している。

堀之内I期の段階では内湾性のハマグリが主体、加曾利B式から安行I式にかけてはヤマトシジミがしだいに増し、安行IIからIII a式の段階にはヤマトシジミが主体となっている。

大柴町奈戸貝塚^{②6}も支谷深部の貝塚で、加曾利B式期にヤマトシジミを主体にハマグリ・シオフキといった内湾性の貝とサルボウガイを出土し、安行Iの段階ではヤマトシジミが大半を占めている。

神崎町吉原貝塚は加曾利B式期にはヤマトシジミ・ハマグリ・サルボウガイを主体とし、安行I式期はヤマトシジミが主体となる。^{②7}

佐原市大倉南貝塚は利根川から若干内に入った貝塚で、加曾利B2から安行I式の時期である。^{②8}ハマグリが過半数を占め、シオフキ・アカニシが次ぎ、チョウセンハマグリ・ダンベイキサゴといった外海性の貝類も若干見られる。

このように、成田市以西の貝塚が加曾利B式の段階から淡水性のヤマトシジミが卓越し、後期末から晩期には淡水性の貝が主体をなしていく。これに対し、利根川に近接した下流域の大倉南貝塚では、加曾利Bから安行I式にかけて、まだ内湾性の貝が主体を占めている。このように、縄文後期中葉（加曾利B式期）の段階から、利根川支谷部の淡水化が進行し、その時期が余山貝塚の初源期と合致することは、海退現象との関係も含め興味深い。標高4・5mがボーダーラインとなるのであろうか。

貝の種類においては、チョウセンハマグリに代表されるように外海性のものがほとんどで、浅海の泥底に棲息するオキシジミや淡水性のヤマトシジミは申しわけ程度しか見当たらない。当然、高田川、三宅川などの小河川部は鹹水性の低い入江が形成されていたことだろうし、南側の後背地にはヤマトシジミの棲息域が存在していたと思える。しかし、外海性の貝類が主力を占めているということは、外海の貝類を重点に採集していたのだろう。また、地理的条件が整っているとはいえ、骨角器の銚、濶が多いことから海洋漁労活動に主力を置いていたことがうかがえる。これは、骨類の中の魚骨の量からも裏づけられよう。更に、貝サンプル中に、ベンケイガイが極めて少ないことに注目したい。このことは、貝輸出土量からすると意外である。このことは、石器の組成とも係りをもつ可能性がある。

貝輪の出土例はおびたしい量であるが、^{②6}時期的にとらえ得る資料は少ないといえる。ただ江見氏の発掘した地点から、安行II式の大形注口土器中に貝輪が15個入れられたものや、安行III a式に伴って多量の貝輪（1人で1日200個を越える数を掘り上げている）が出土している。^{②1}このように後期末から晩期前半にかけて今回の調査ではBIトレンチの土壙群があり、そこから出土した石器に縦長の河原石があるが、その用途は貝輪製作時に使用された道具であろうことは想像にかたくない。また、砥石の類も多く、玉砥石も特徴的な出土品といえる。

このように、余山貝塚に遺物を残した人々は、漁労活動に主力を置くとともに、貝輪・玉類等を集中的に製作しており、これらの品物は当然交易品として他の地域に運ばれたろう。したがって、余山貝塚は、その地理的環境を生かした生産遺跡としての性格の強い貝塚として捕えることは飛躍しすぎであろうか。本貝塚の性格については、今後、周辺遺跡、周辺貝塚との関連を明確にしていく作業が必要となろう。

註1 中央部は、昭和34年の道路改修工事に伴う緊急調査がなされたが、当時の写真から加曾利B式深鉢と安行Ⅲa式注口土器を識別することができる。

『余山貝塚資料図譜』 昭和61年 国学院大学資料室

北側は、『地中の秘密』本文中に出土品の図が掲載されているが、安行Ⅱ～Ⅲaの遺物がある。「貝層の厚味は6尺掘っても基盤まで達しない。」というから、2m近くの貝層、包含層が堆積していたようだ。

『地中の秘密』 明治42年 江見水蔭 博文館

註2 銚子市宮原町後原遺跡、桜井町神出遺跡、野尻町下宿貝塚、柴崎町柴遺跡、松岸町宮下貝塚などがある。

註3 昭和63年度高田川改修工事に伴う発掘調査（千葉県文化財センター）においても、Bトレンチ南西側の高田川右岸で包含層の広がりを確認している。特に注目されることは、縄文晩期後半の遺物を多量に出土していることである。余山貝塚の継続年代をさらに新しくしたもので、今後の研究に貴重な資料となった。

註4 小松繁氏、伊藤睦憲氏の御教授をいただき、また、Cトレンチ調査でも実証された。

註5 『大学が掘ったのは中央部である。水谷氏の掘ったのは南端の松山、余の掘ったのは北端の雑木林である。実は両方ともたいがい掘りつくしているので、別に新領土を開く必要を生じている』（地中の秘密より）このことから、Bトレンチ貝層部の攪乱坑は、この項のものかもしれない。

註6 昔、農家の人たちが俵一杯の貝輪と酒を交換したというのは有名な話して、余山貝塚資料図譜にも大量の貝輪が掲載されているが、これもほんの一部にすぎない。

文1 「銚子紀行（貝塚掘りと海岸巡り）」坪井正五郎、松村瞭他 東京人類学会雑誌第233号 明38

『地中の秘密』 江見水蔭 博文館 明42

文2 「貝塚叢話」 高島唯峰 考古界8-5 考古学会 明42

文3 「千葉県銚子市余山貝塚」 佐野大和、野口義磨、日本考古学年報6 誠文堂新光社 昭28

文4 『余山貝塚資料図譜』 国学院大学考古資料館 昭61 に詳しい

文5 「千葉県成田市荒海貝塚C地点発掘報告」 西村正衛 学術研究14 昭40他

文6 「千葉県香取郡奈土貝塚発掘報告書」 西村正衛他 早大高等学院史学研究誌第1号 昭32

文7 「吉原貝塚」 日本考古学年報 昭37

文8 「千葉県香取郡大倉貝塚」 西村正衛、金子浩昌 古代21・22合併号 昭31

版 圖



1. 貝塚碑



2. 遺跡遠景



3. A地点近景



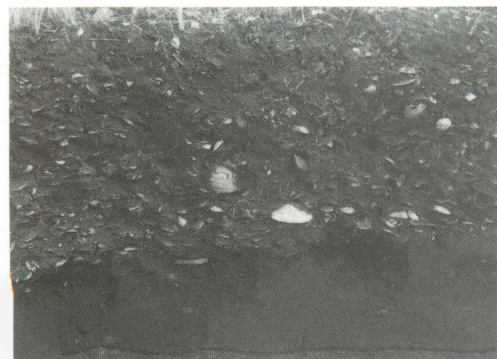
4. Aトレンチ



5. B地点近景



6. B I トレンチ 貝層断面



7. B I トレンチ 貝層断面



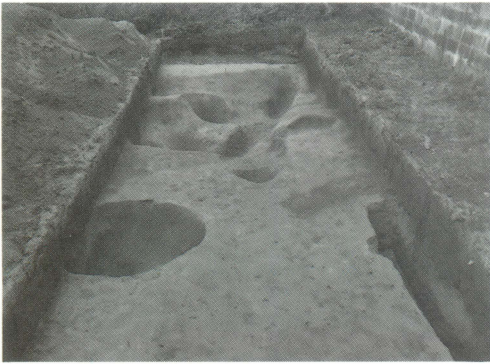
8. B I トレンチ 貝層直下遺物出土状況



1. B I トレンチ P-11・12 遺物出土状況



2. B I トレンチ P-6 遺物出土状況



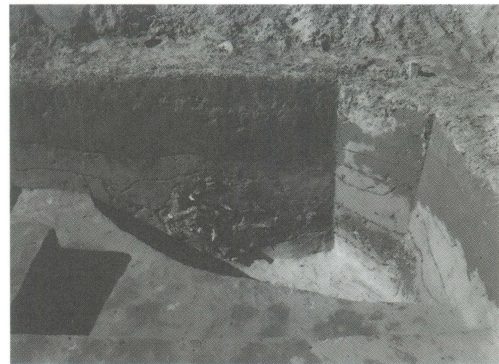
3. B II トレンチ全景



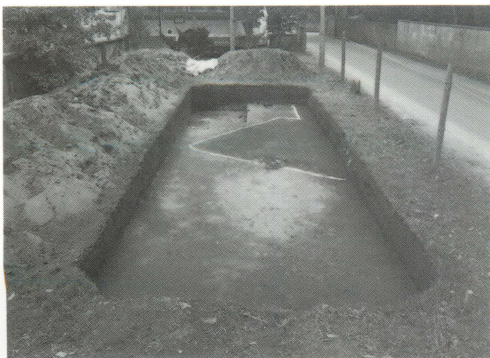
4. B II トレンチ溝状遺構断面



5. C 地点近景



6. C トレンチ土壌断面



7. C トレンチ全景



8. D トレンチ全景



1. B I トレンチ貝層断面



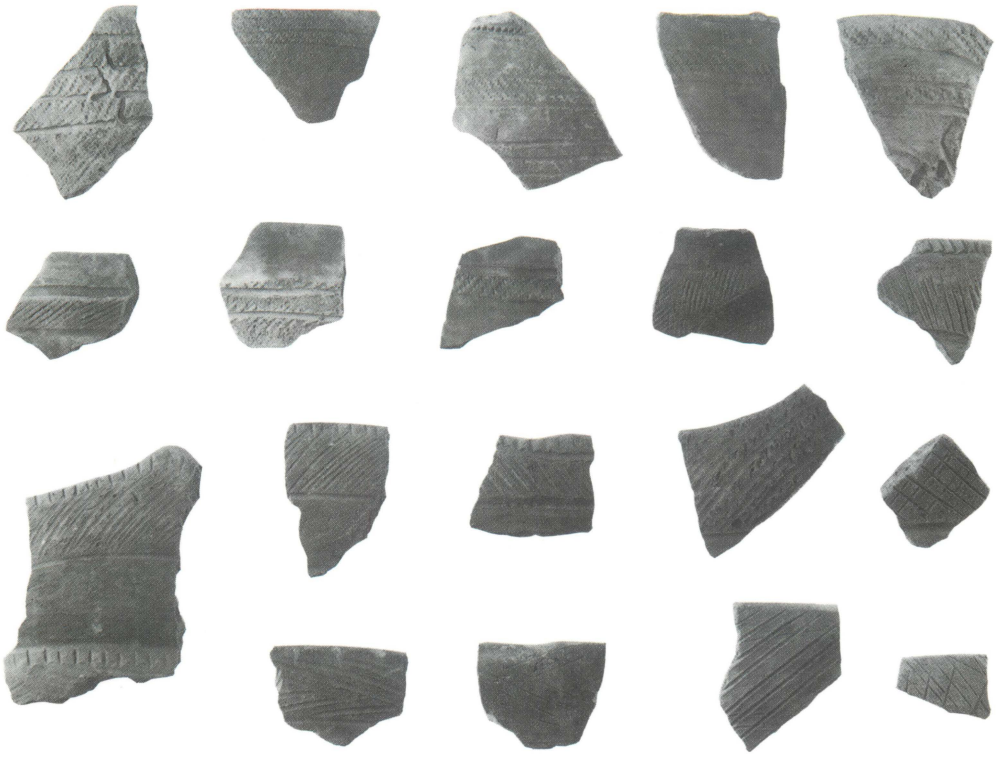
2. B I トレンチ土壙群全景



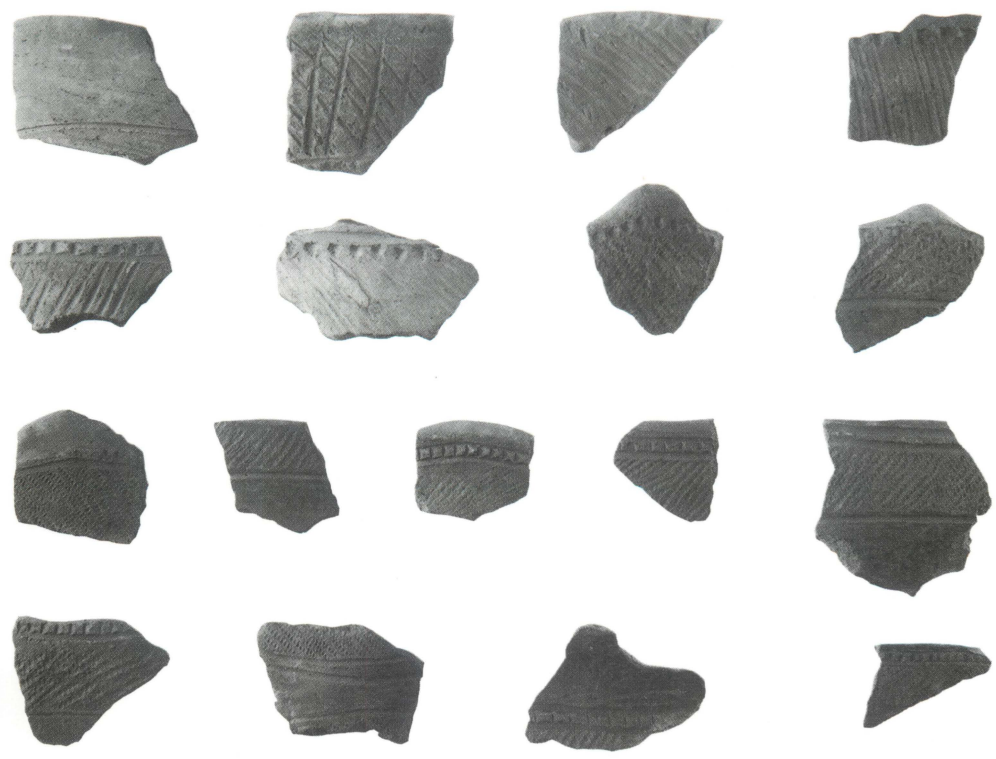
貝層直下



貝層直下



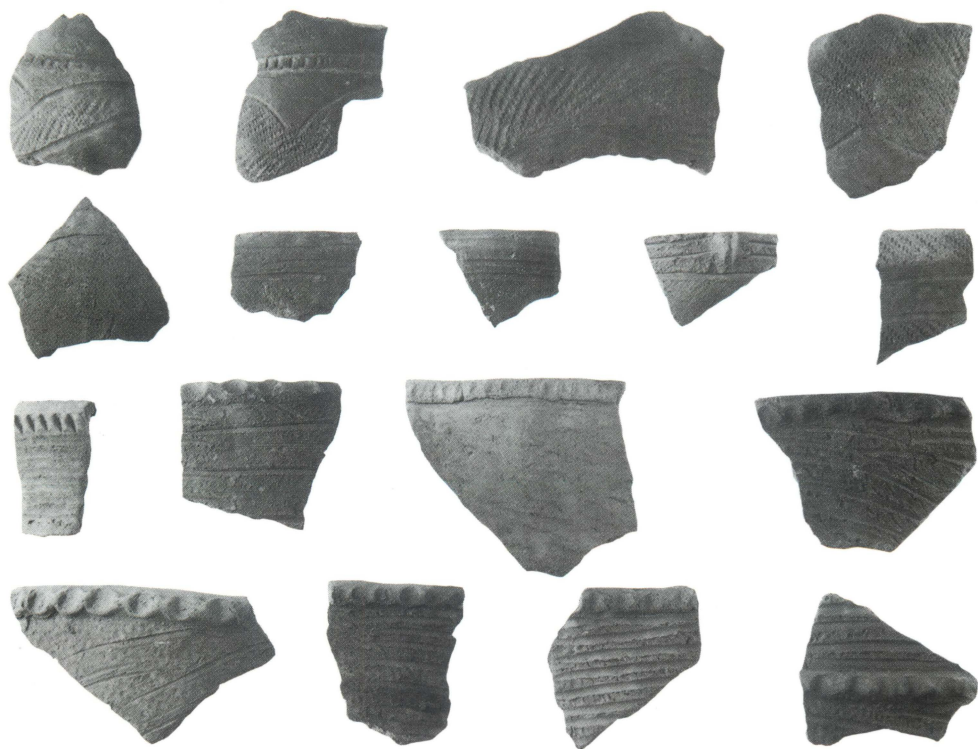
貝層



貝層



貝層



貝層



土城、包含層

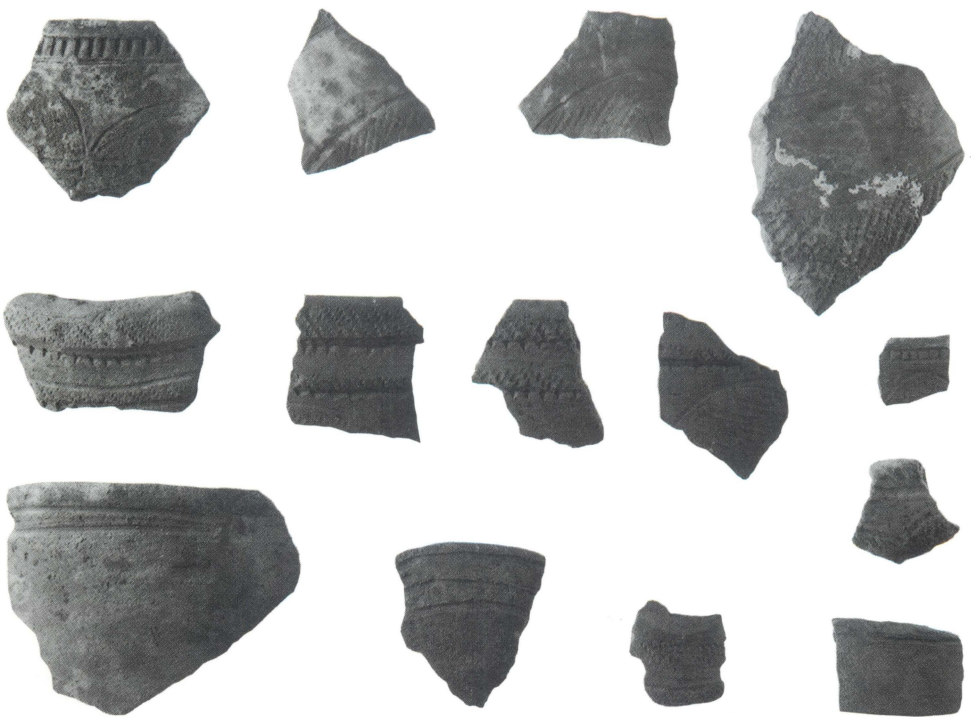


土城、包含層

出土遺物（土器 4）



土壤、包含層

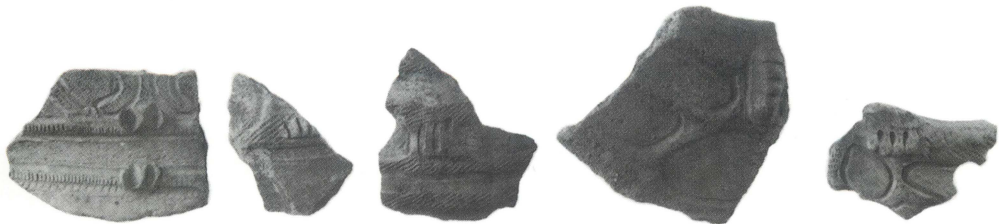


土壤、包含層

出土遺物（土器 5）



土壙、包含層

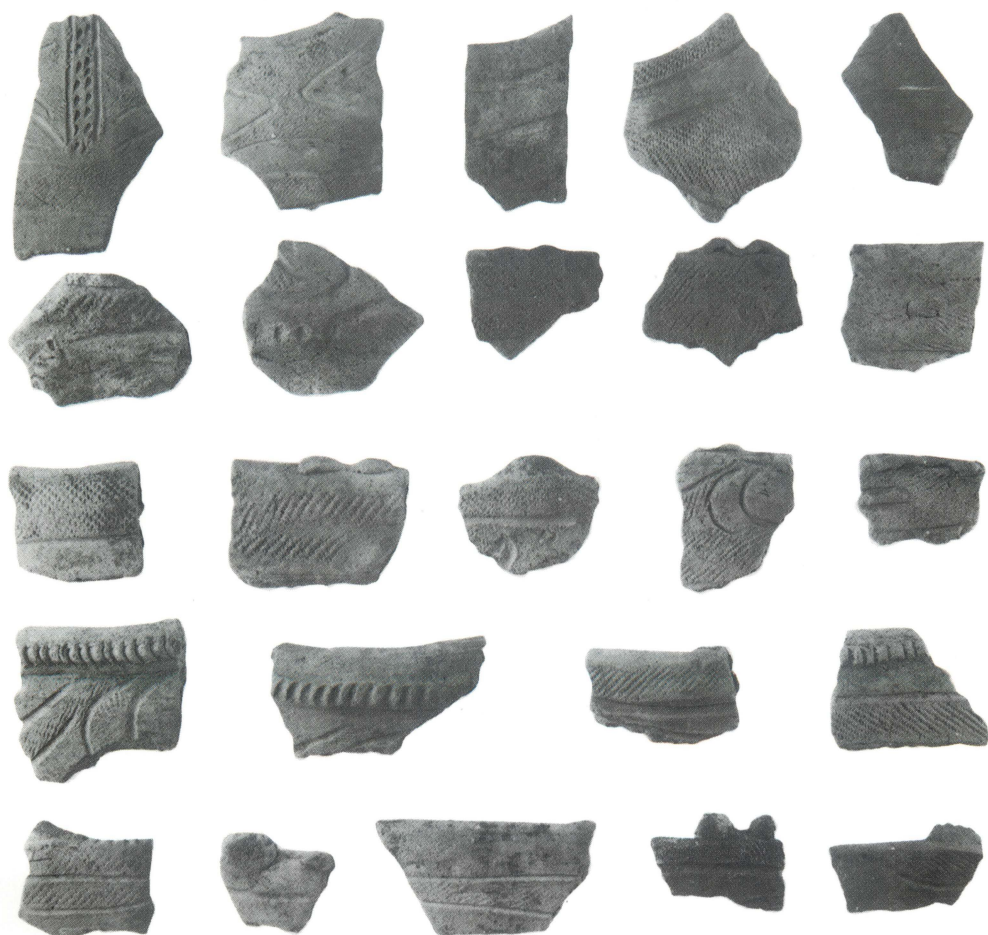


土壙、包含層

出土遺物 (土器 6)

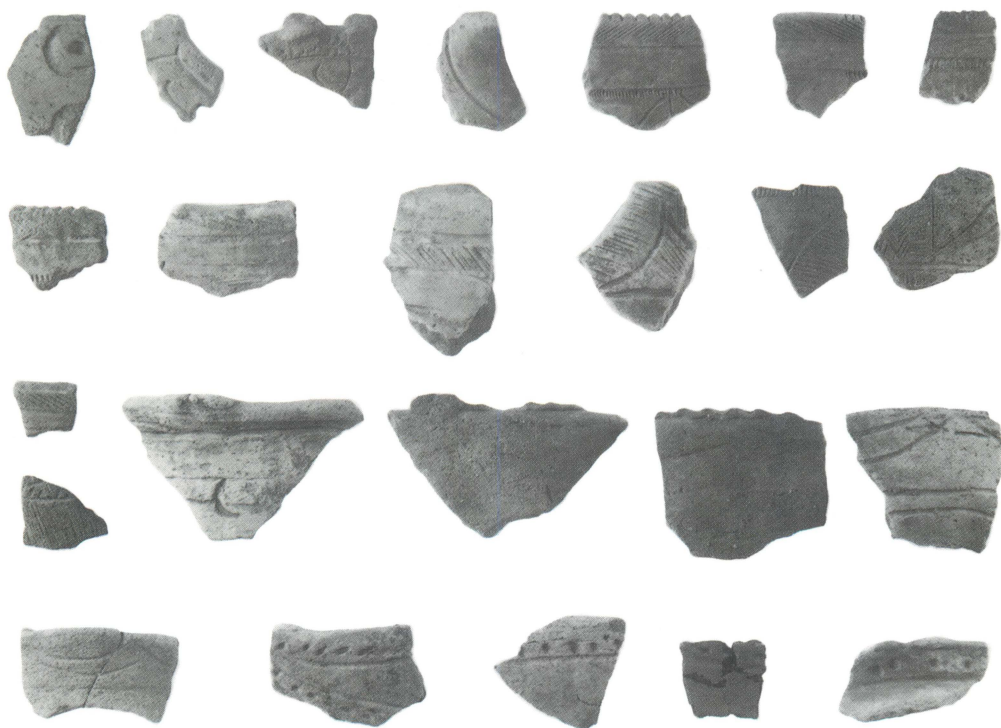


土壙、包含層

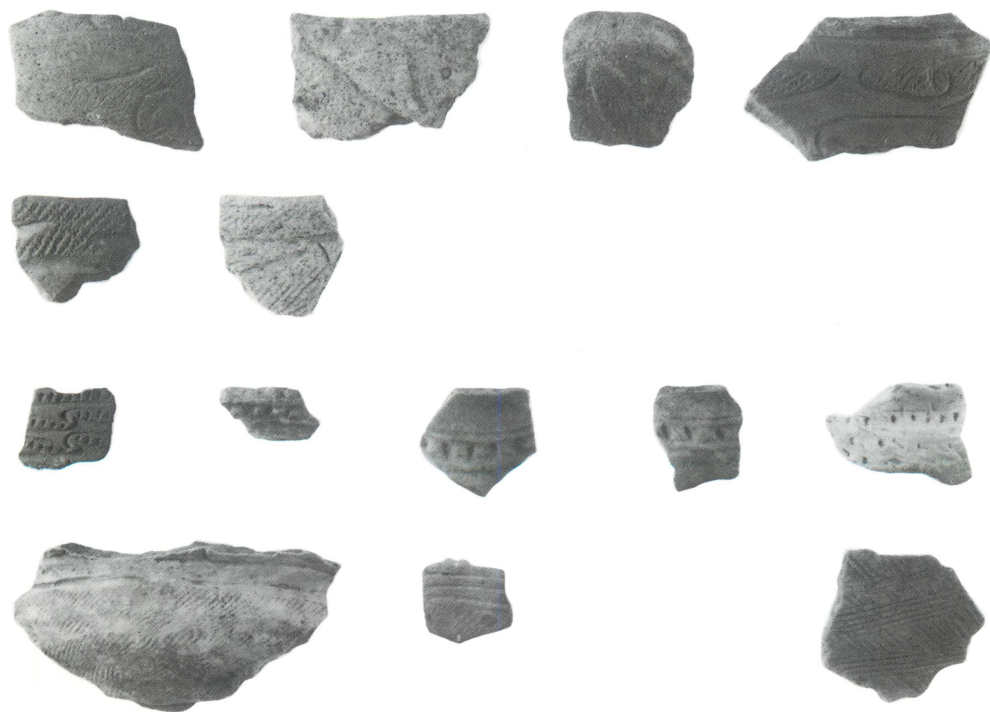


土壙、包含層

出土遺物（土器7）

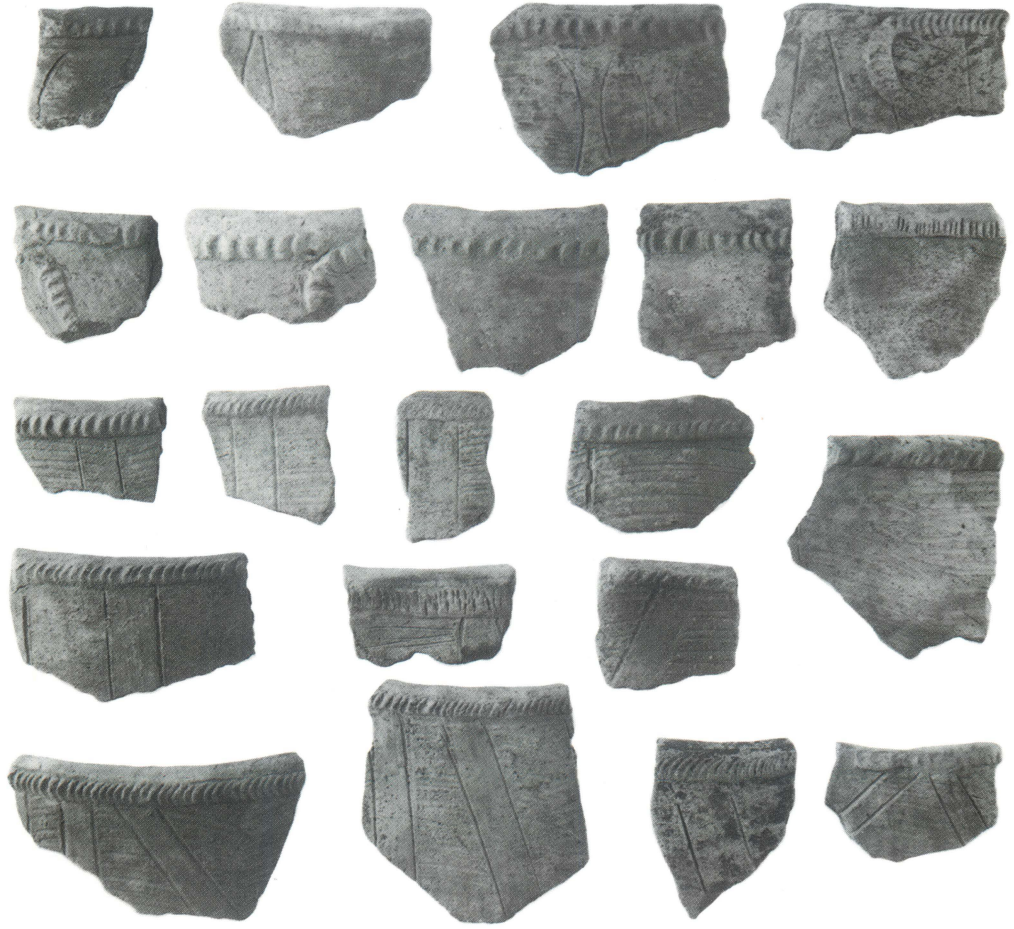


土城、包含層



土城、包含層

出土遺物（土器8）



土壙、包含層



土壙、包含層

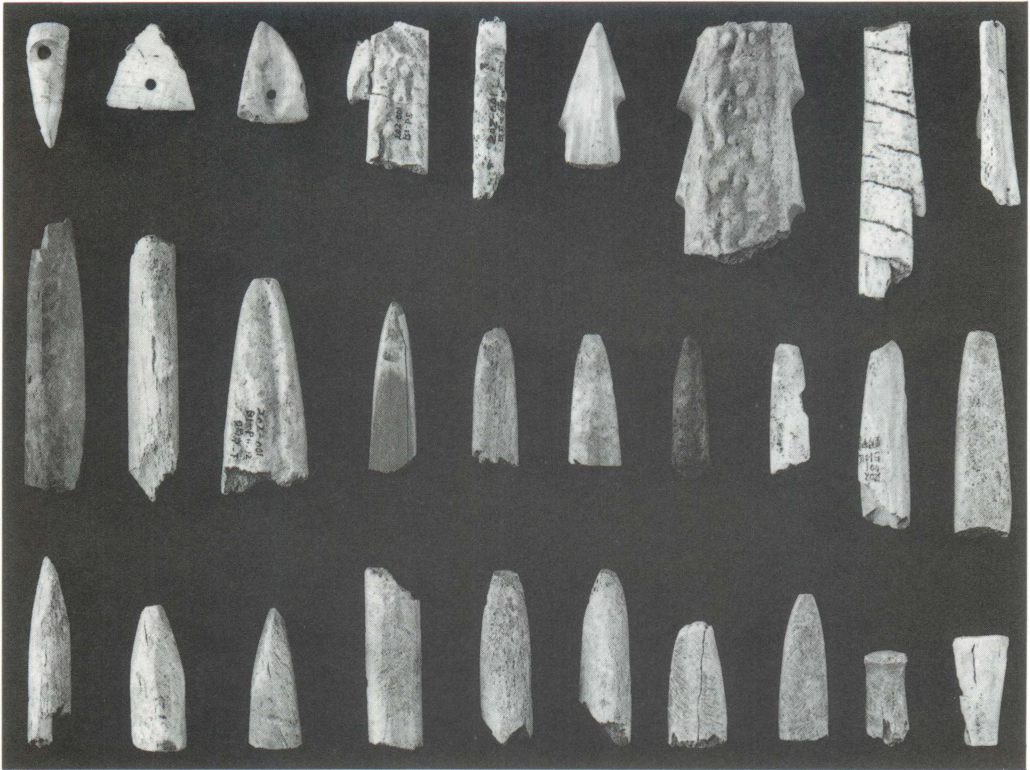


土器 貝層直下

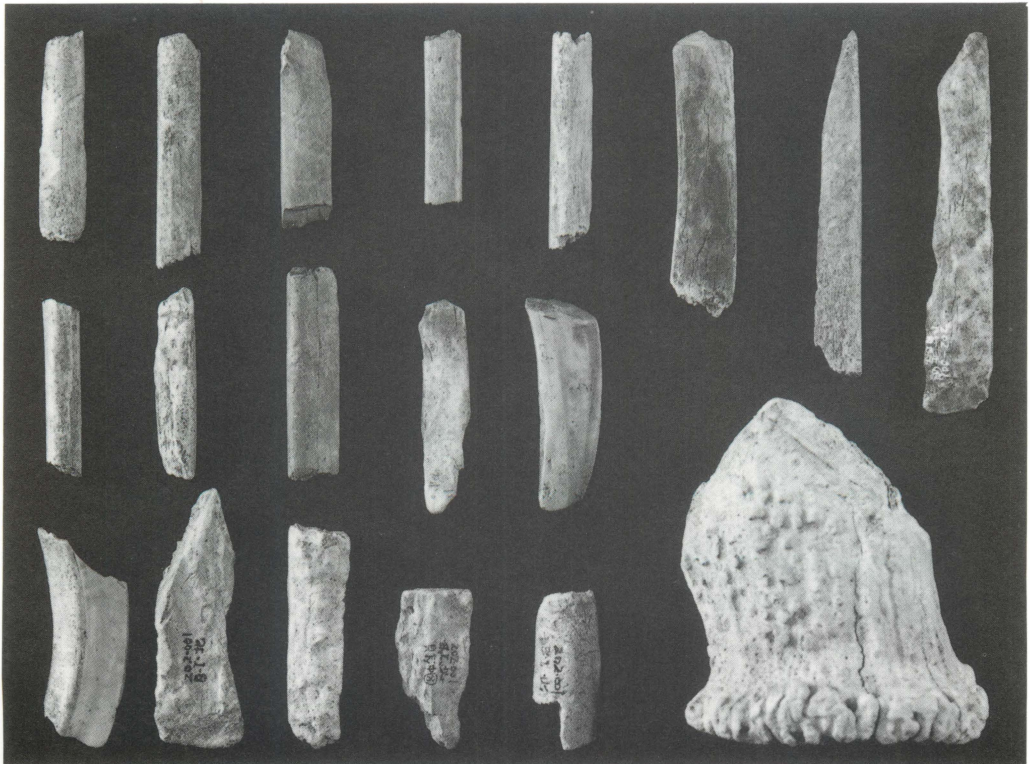


土製品、玉類

出土遺物 (土器10、土製品・玉類)

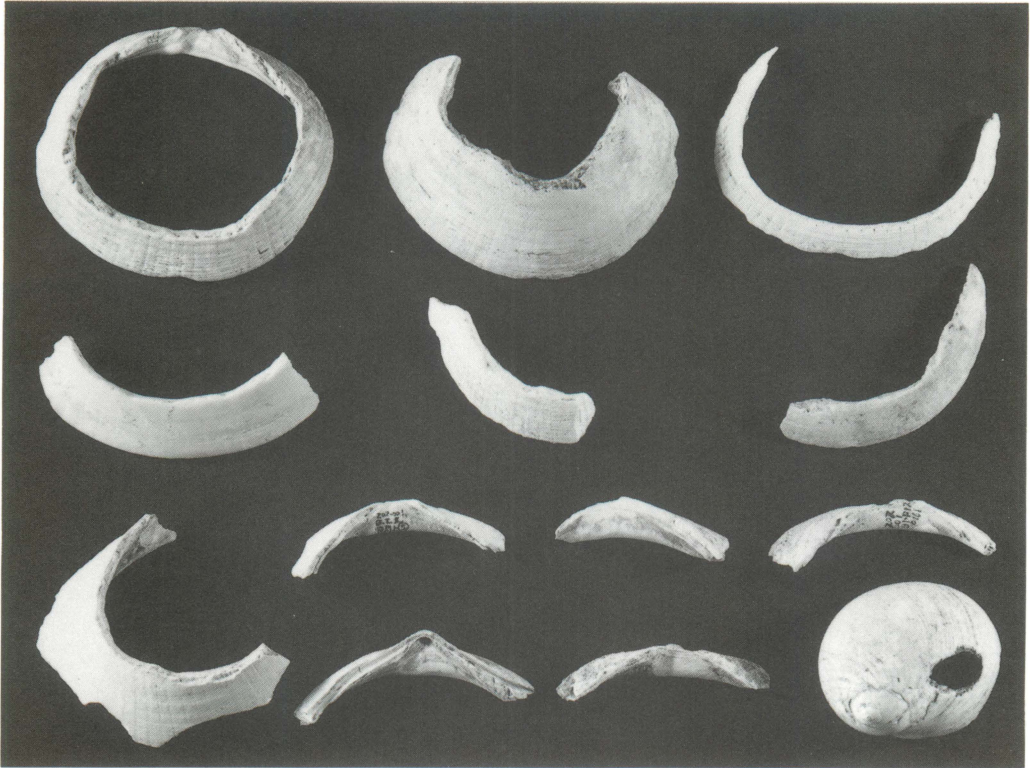


垂飾品、鈺、稽他

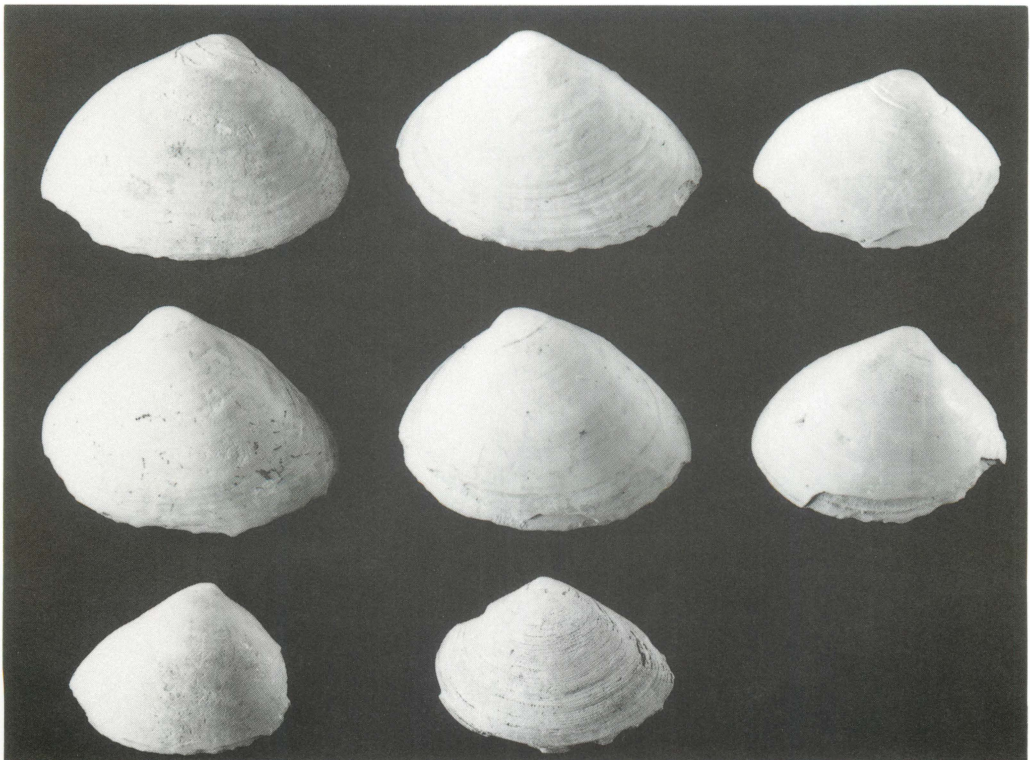


稽、未製品他

出土遺物（骨角器）

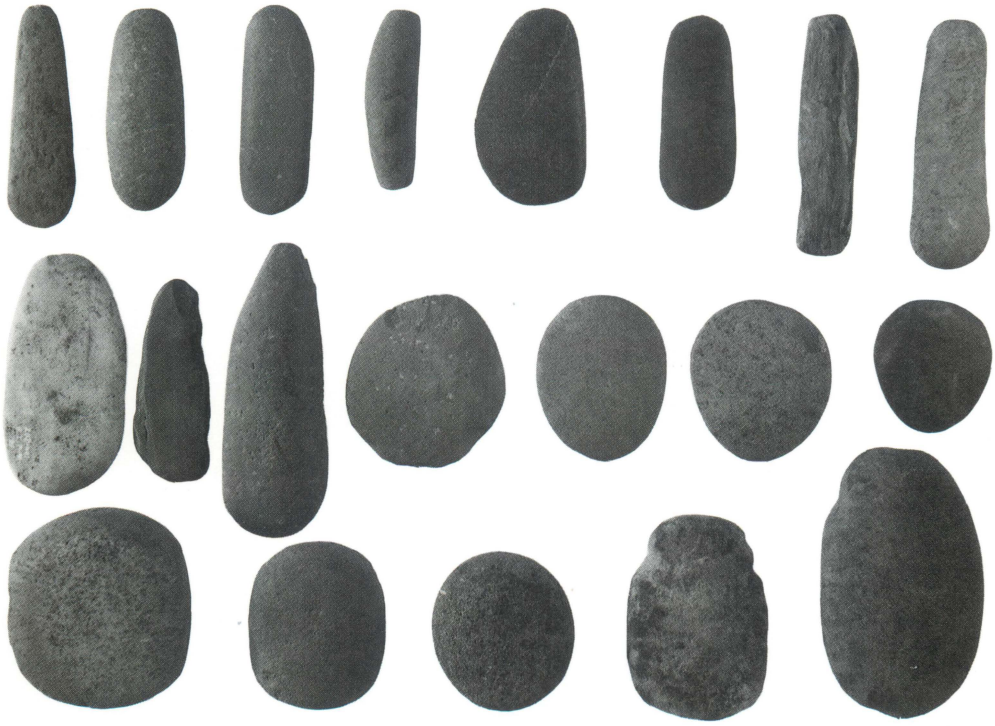


貝輪



貝刃

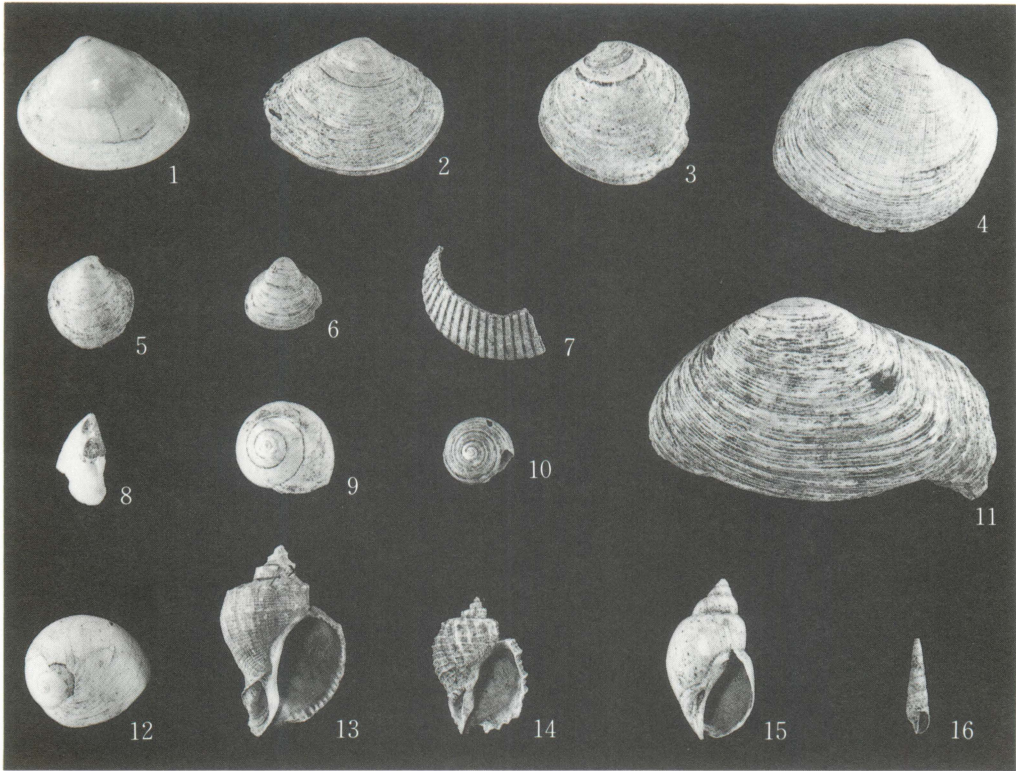
出土遺物 (貝製品)



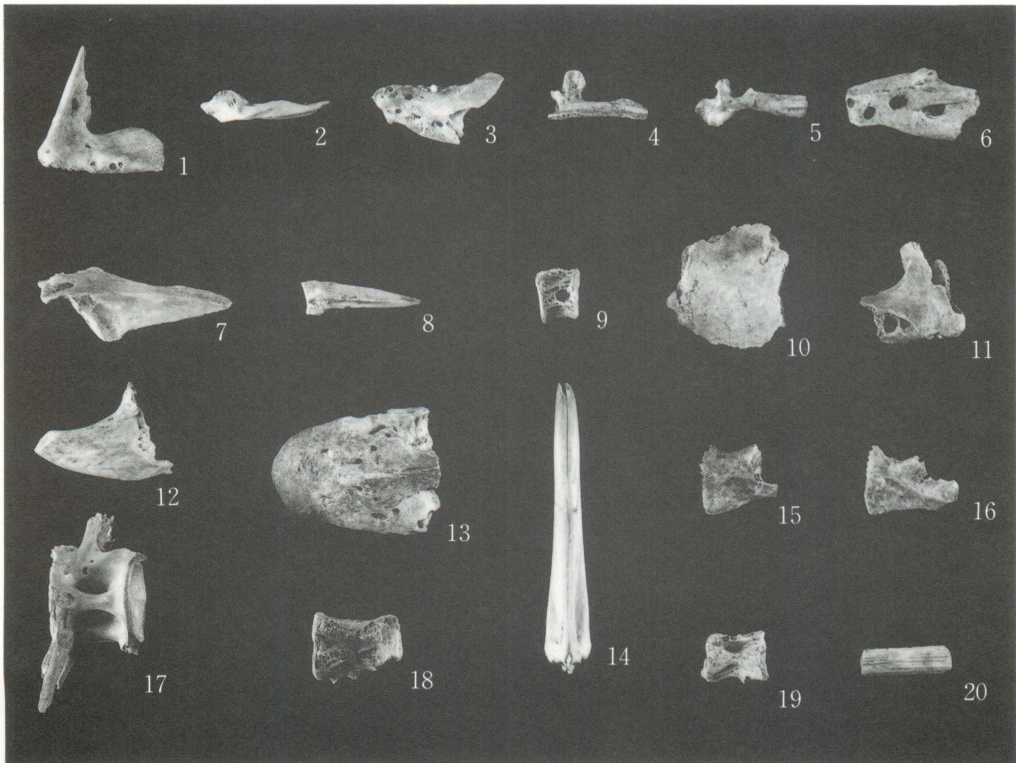
磨石、砥石



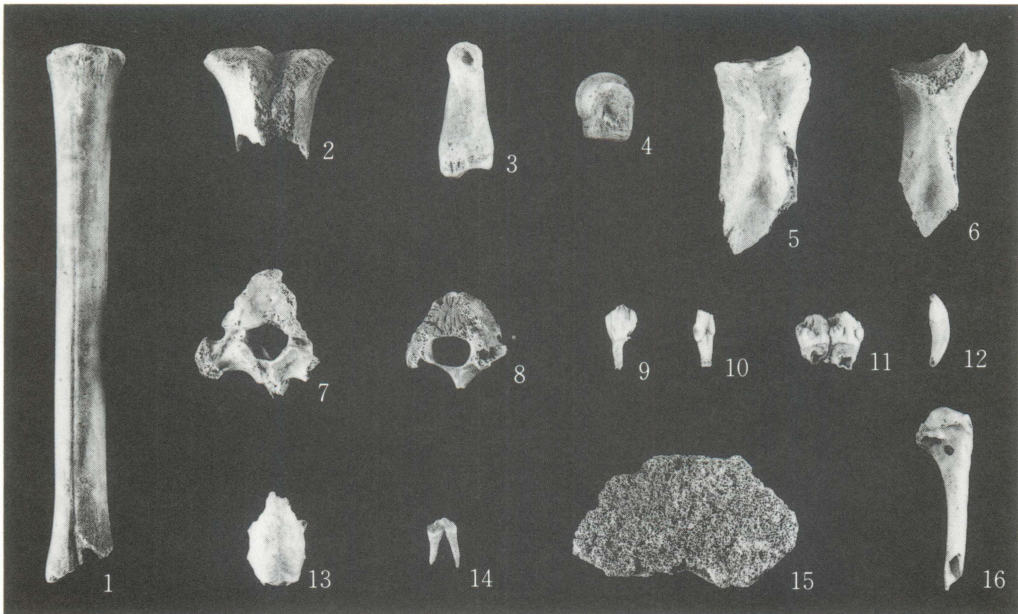
石剣、砥石、磨製石斧他



貝類



魚骨



獣・鳥骨

貝類

1. チョウセンハマグリ
2. コタマガイ
3. ワスレガイ
4. ベンケイガイ
5. オキシジミ
6. ヤマトシジミ
7. アカガイ
8. イガイ
9. ダンベイキサゴ
10. キサゴ
11. ミルクイ
12. ツメタガイ
13. アカニシ
14. トカシオリイレボラ
15. バイガイ
16. コゲチャタケノコガイ

魚骨

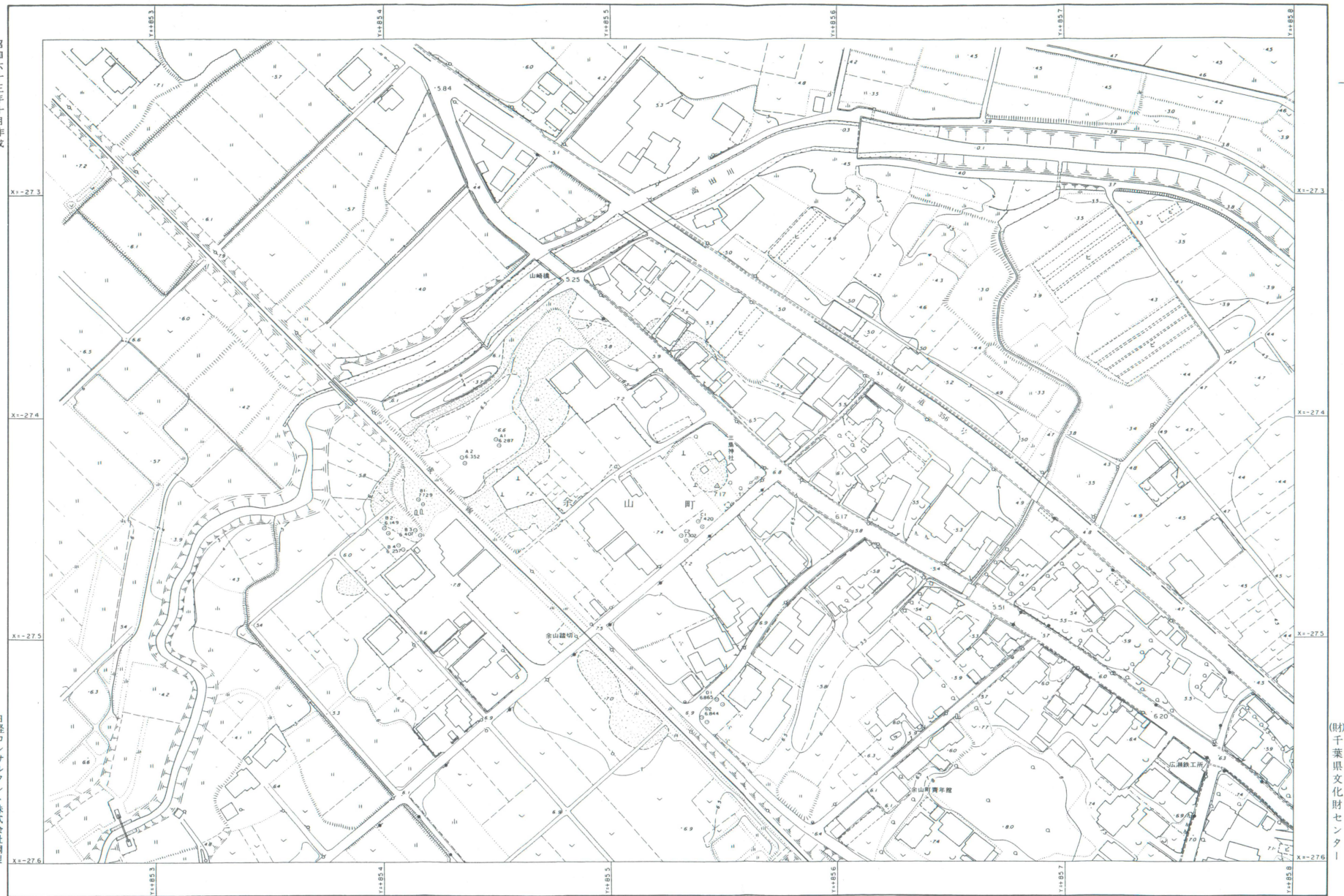
1. クロダイ属前上顎骨
2. 同 上顎骨
3. 同 歯骨
4. スズキ属前上顎骨
5. 同 上顎骨
6. 同 歯骨
7. 同 関節骨
8. 同 方骨
9. 同 腹椎
10. 同 主鰓蓋骨
11. マダイ前上顎骨(右)
12. 同 口蓋骨
13. 同 前顎骨
14. タイ科担鰭骨(臀鰭)
15. トラフグ属上顎歯板
16. フグ科歯板
17. マグロ属尾椎
18. ブリ属腹椎
19. サワラ属尾椎
20. エイ属尾棘

獣・鳥骨

1. シカ左中手骨
2. 同 右脛骨
3. 同 指骨
4. 同 中足骨か中手骨の遠位端
5. 同 左肩甲骨
6. 同 左肩甲骨
7. 同 椎骨
8. 同 椎骨
9. 同 臼歯
10. 同 臼歯
11. イノシシ臼歯
12. 同 犬歯
13. イタチ頭蓋骨
14. イヌ科臼歯
15. クジラ類
16. カモ類大腿骨

銚子市 余山貝塚

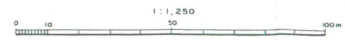
昭和六十二年十月作成



日経コンサルタント株式会社調製

(財)千葉県文化財センター

折込付図 余山貝塚地形測量図



千葉県文化財センター調査報告第169集
銚子市余山貝塚確認調査報告書
—千葉県主要貝塚確認調査報告書第1集—

平成元年 3月31日発行

発行 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県葛城2丁目10番1号

印刷 旭印刷株式会社

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。